の創作を一生の事業としながら、自國の最大の小説とされてゐる「源氏物語」を通讀してゐる者が幾人ゐるであらうか。「ハムレット」や「アンナ・カレニナ」や「罪と罰」は、首尾を通じて熟知してゐても、「源氏」は、「桐壺」と「帚木」ぐらゐをのぞいただけに止まるものが多いのではあるまいか。紅葉や一葉は「源氏」の文章を學んだと聞いてゐるがそれだつて、どこまで深入りしたことやら。例の花鳥風月の敍景の優にやさしい文辭を模しただけに留まるのではあるまいか。

ところが、私は今度、英人アーサー・ウェレー譯の「源氏」を通讀して、日本にもこんな面白い小説があるのかと、意外な思ひをした。小説の世界は廣い。世は、バルザックやドストエフスキーの世界ばかりではない。のんびりした戀愛や詩歌管絃にふけつてゐた王朝時代の物語に、無限大の人生起伏を感じた。高原で星のきらめく廣漠たる青空を見たやうな氣がした。

最後の「夢の浮橋」に一介の使者に過ぎない浮橋の弟を點出して、長物語を切つたところなど、讀後に悠々たる人生の感じがいつまでも心に殘るが、譯者ウェレーも、西洋の古今の小説に決して見られない筆使ひとして賞讃してゐる。作爲のない技巧の妙は、全篇を通じて見られるので、女三の宮の寵愛の猫の戯れが、彼女に戀してゐる柏木をあやつつてゐる光景の如きは、小説の極致に達してゐるといつていゝ。

明治以前では、もつとも鑑識の傑れた批評家であつたといつていゝ本居宣長の「源氏」論は一々當を得てゐる。

だが、紫式部の原文を讀むと、今の私にも、なほ名文とは思はれない。二三枚も讀むと卷を投じたくなるほどに頭腦の倦怠を覺える。人物や事件の印象も、甚だ不鮮明である。私は略三分一ばかりは、譯文と原文とを照合はせて見た。飜譯といふものも面白いものである。千年も前の讀みづらい日本の古典が、現今の英文に化して明快に我が心に映つてくるのは、愉快である。日本人でさへ古文章の解釋に迷つていろ〳〵の說があるくらゐだから、外人の飜譯に、間違ひらしいもののあるのは當然である。抄略されたところも少くない。

宮中の儀式など、こま〴〵と煩はしく書かれて、今日の讀者には、全然興味のないものは、多くははぶかれてゐる。「鈴蟲」の一章は全部削られてゐる。この譯者は、この長物語完譯の大望を抱いて、こつ〳〵筆を運んでゐる間に、重患に罹つて、完成は覺束ないと氣遣はれたさうだが、「若菜」から「鈴蟲」あたりが、病氣に關係があつたのではあるまいか。その部分がもつとも抄略が烈しい。早く完成させたさに筆が急いでゐる。しかし病氣が回

復して「宇治十帖」は、たつぷりと原文の妙味以上のものを傳へてゐる。私は、原文と對照しながら、しば〳〵譯文の方が原文よりも傑れてゐると思つた。あの原文を文字の意味だけ和文英譯したなら文學として讀まれたものぢやない。ウェレーはロセッタ石の象形文字を讀みほぐしたやうに日本の古文學を讀みこなしながら、それを自分の文學に仕上げた。創作的飜譯である。

私は故山口剛氏の西鶴研究を讀んで、「一代男」がすつかり「源氏物語」の飜案であり、模倣であることを知つた。「形見の水ぐし」や「夢の太刀風」のやうな象徴味のある妙趣向も、「夕顏」の飜案であつたのかと思ふと、お座がさめる譯だが、しかし、西鶴は源氏の形を借りて、自己の時代の世相を活寫したので「各章の飜案ぶりの奇拔、時に原據にひたりと即き、時に原據からさらりと離れて、人々を驚かさうとしたのであらう」と山口氏はいつてゐる。

ウェレー氏は、はじめから異邦の古文學の忠實なる完讀を企てたので、自まゝな創作的

飜譯をしたつもりではないのであらうが、言語の甚だしい隔たりを破つて、一篇の物語に生命を與へて活躍させんと心がけてゐるうちに、飜譯は自(おのづ)から創作となつたのである。「源氏」は、西鶴やウェレーに新しい文學を生みださせたやうなものだ。ウェレーは、歐洲の文學者であるために、花鳥風月の描寫の飜譯には惱んだらしく、語彙も「源氏」ほど豐富でなく、同じ言葉の繰り返しに過ぎぬことがあるが、人間の心理は原作よりも遙に鮮明になつてゐる。日本の古典學者が何といはうと、私などは、紫式部の「物語」には隨いて行けない氣がして、この舶來の「物語」によつて、新に發見された世界の古文學に接した思ひをしてゐる。

「アラビアンナイト」や「ドン・キホーテ」がその國々の特種の文學として、世界の文壇に珍重されてゐるやうに、英譯によつて紹介された「源氏」も、他に類のない文學として、今後世界的に鑑賞されるに違ひないと、私は思つてゐる。たゞ滑稽小說に見なされてゐた「ドン・キホーテ」が後世になつて、いろ〳〵な解釋を施されて、大變な文學になつたごとく、「源氏」もかの國の評論家に依つて、さま〴〵な意味を附加へられて、有難がられるやうになるだらうと、私は期待してゐる。

人間は刻々の生存本能に驅られて浮きつ沈みつしてゐる。集團的人生は、一つ〳〵の波紋を描きながら、一人の人間、一かたまりの人生が消えては、他の一かたまりの人生が現

はれて水の上に或模様を描いてゐる光景が讀後に殘るのは、古今東西の偉大なる作品に通有の妙所であつて、「源氏」はその妙味が豊かである。

ウェレー氏の譯本だけを讀む外國人には分らないだらうが、原本と譯本とを比較して讀むと、譯本が「源氏」離れがしてゐて、別種の「源氏物語」を創出してゐることが感ぜられるが、傑れた飜譯はそれでいゝのではあるまいか。坪内博士のシェークスピアの飜譯を讀んでも私はさう思ふ。「ハムレット」を原文と譯文とを讀み比べてみて、同じ感じが得られるであらうか。譯文は餘程、沙翁離れがしてゐるやうに思はれる。歐洲諸國の文學を譯するのとはちがつて、「源氏」の英譯、沙翁の日本譯の如きは、不可能な難事業を敢てするやうなもので、飜譯を生命あるものとするには、譯者の創作的才能を發揮しなければならない。「飜譯は反逆なり」は本當であるが、反逆を敢てするところに、飜譯の妙味が出るのである。

我々は原文の大まかな意味だけを和譯されたものによつて西洋の大文學を味つたつもりで、トルストイがどうの、バルザックがどうのといつてゐるが、日本の和歌や小說をそれ等の英譯と對比して如何に兩者の趣きの相違してゐるかを知るにつけ、西洋文學を和譯によつて鑑賞することの不完全さを今更の如く感じた。

「浮草」や「卽興詩人」は、譯者の生命がこもつてゐるから面白いのであらう。「源氏」だつて、原作に拘泥せずいぢけてゐないからいゝので、凡庸人の筆に成つた飜譯文學は死文學である。文學藝術に於ても知識を廣く世界に求むる必要があり、我々はその慾望に驅られてゐるのだが、不斷求め得たつもりの知識は、淺薄至極なものである。それで大抵は滿足してゐるので、眞に徹しなければやまないやうな知識慾を有つてゐるものは、甚だ稀なのだ。拙劣な模寫や寫眞版によつて、ラファエルやミケランゼロの偉大な藝術の味ひを鑑賞し得られる筈はないのだが、それと同樣に、露語佛語に熟通せずして、トルストイやバルザックの藝術を鑑賞したつもりでゐるのは不當である。

外國文學に關する我々の知識はインチキなものである。私などは長い年月、インチキな知識を蓄積することに努力したやうなものだ。徒らに廣く知識を求むることばかり心がけないで、一人の傑れた作家を徹底的に追究した方が自分の心の修養になりさうに思ひながら、今日まで散漫に失して一事に集中し得なかつた。「源氏物語」を一生の研究題目としてゐる篤學者などに感心する所以である。

私が英譯「源氏」を讀み耽つてゐるのを、のぞき見した或外人が、「君は英文の味ひが分るか」と率直に訊ねた。私ははつきりした返事をしなかつたが、後で自分で考へた。英文の妙味がどれほど分るかは別として、少くも紫式部の原文よりも、ウェレーの飜譯の方がよく解つて、文學味も一層强く感受されるのは事實なのだ。飜譯を通して原作の面白さの知られるやうな有樣なのだ。私が、王朝の古典の讀み方を知らないためでもあらうが、ウェレーの譯し振りが非凡なためでもある。日本にも、ホーマーとかダンテとかの外國の古典を、こんなに自由に譯しこなす者があつたら、わが文壇もそれに依つて眼界が廣くなることだらう。

今回若い歌舞伎俳優が舞臺に上すための「源氏」の脚色にしても、原作の形に拘泥したら、生氣の乏しいものになるかも知れない。西鶴の「源氏」飜案について山口氏がいつてゐるやうに、「時に原據にひたりと卽き、時に原據からさらりと離れ」て、現代人の息を吹き込むのは必要である。英譯者が茫漠たる異鄕の古典の人物を現代に生かしたやうに、今の

舞臺に生かさねばなるまい。德川時代の小說や淨瑠璃の人物に比べると、王朝時代の物語の人物は、一層多く眞實性に富み、現代人に共鳴される素質をもつてゐるのであるから、脚色や演出がよろしきを得れば、上演の效果はあると思はれる。

（昭和八年十一月東京朝日新聞）

輕井澤にて

長谷川傳次郎氏の「ヒマラヤの旅」には、二萬尺以上の靈峯を跋渉した時の壯快な印象が記されてゐる。古來、現世の罪や穢れを洗ひ清めるために參詣すべき聖地として印度人に憧憬されてゐたカイラースの湖畔などは、この世のものとは思はれないさうである。そこは、一本の樹木もない茫々たる土塊のなかの水溜であるに關はらず、たゞ空氣が清澄であるために、天國のやうな光景を呈してゐるのださうである。私にも、その光景が微かに空想されないことはない。海拔三千尺に過ぎない輕井澤にゐてさへ、快く晴れた朝など、ふと、下界に居る時とは生き心地の異つた恍惚境にゐるやうな感じに打たれることがある。二萬尺の高原と云へば、輕井澤の七倍の高さである。この世のものとは思はれないのは當り前である。「この世のものとは思はれない」ところに自分の身を置いてゐる氣持、さういふ境地にゐては、生きてゐてもよく、また死んでもいゝやうな氣持。……長谷川氏などのやうなカイラース順禮者が、口にも筆にも現はし得ない讃美の感じが、私の心にも微かに傳へられさうに思はれる。

樹木の枝ぶりがどうだとか、築山や泉水の形がどうだとか云つたやうな、日本の庭園風のこましやくれた技巧なんかは、清澄な空氣のなかにあつては、餘計なものであつて、三

千尺、一萬尺、二萬尺の高地では、澄んだ空氣だけが、絶對美の世界を我々の眼前に髣髴させるのである。……私は、輕井澤の大路小路を、當てもなく、あちらこちらと歩きながら、未知のヒマラヤの高原を空想し、一瞥したことのあるスコットランドの高原や、スイスの山地を追想してゐる。いづれも小說離れのした世界である。二萬尺の山嶽を攀登るなんて凡人の企て及ぶところではないが、カイラースの湖畔は、「この世のものと思はれぬ」が、これは現世の樂園であると、長谷川氏の云つてゐる印度の西北の高地、カシミールくらゐの所へは私だつて行けないことはあるまい。私は、今年、晩春初夏の頃、四國九州の名所古蹟を幾つか見て廻つたが、子供の時から幾十年も見馴れてゐるものを、所を變へて見るに過ぎない物足りなさを感じた。新しい刺戟は何もなかつた。何處へ行つても、名所には松の木が林立してゐた。松の木がそんなに面白いのであらうか。松の木は武士道とともに、日本魂の表象ででもあるのかと思つたりした。

輕井澤は松の木を誇る日本趣味の名所ではない。外人によつて開拓された國際的避暑地として、今日の時世にも、まだ外人が我物顔に振舞つてゐるのが目ざはりになることもあるが、それよりも、この地にうろ〳〵してゐる青年男女の風俗や擧動が、外人のイミテーションとしか思へないのが、私には撲つたく思はれることが多い。我々にはよく分らないが、こんな日本の避暑地の外人の風俗は、西洋の本場の暑避地の風俗に比べると、野暮つ

たくて田舍くさくつて、薄汚いさうである。だが、日本の青年男女は、意識的に或は無意識的にその模倣をやつて得意になつてゐるので、國粹復活の聲が盛んになつても、異國かぶれの勢ひは堰留められさうに思はれない。飜譯は反逆であつても、明治以來の飜譯時代はまだ續くにちがひない。分つても分らなくつても、シェークスピヤは何となくえらく思はれるのである。

私は、散歩の途上、をり〳〵郵便局の横の掲示板のさま〴〵な貼紙を見ることがある。商店の廣告や、失せ物拾ひ物の知らせのそばに、動物愛護會や人道會の主意書の掲げられてゐるのは、いかにも輕井澤らしく思はれる。十數年前、私が最初この土地で夏を過した時には、江木欣々女史の乘馬姿や尾崎行雄氏一族の乘馬振りが、土地の名物として衆人の目を惹いてゐた。女史のことは最早語り草にもならなくなつたほどに影が薄くなり、尾崎氏は、老いてなほ氣力のあるらしい赭らびた顏をして、街上を漫歩してゐるが、氏は乘馬の樂しみは斷念してゐるらしい。十數年の昔は、この二人の有名人の乘馬が特に、通りがかりの人々の目を惹いてゐたほどに、日本人の乘馬運動は珍らしかつたのだが、この頃は若い男女が、ふと見たところは、外人かと見まがふやうな身裝をして、勇ましく馬蹄の音を立ててゐるのが著しく殖えて來た。動物愛護會の說によると、馬の貸主が羸弱な馬を連れて來ては酷使してゐるのださうである。乘つてゐる當人は、英氣颯爽の勇ましさに自己

陶醉してゐても、乘せてゐる馬の方では靑息吐息なのださうである。も一つの人道會の主張によると、避暑客は飼犬の多くを、歸京の時に打ちやらかして行くらしい。殘された犬は、野良犬になつて、食物の缺乏とともに危險性を帶びて來るさうである。數年前、この土地の場末で情死があつたが、野良犬どもが、その情死の死體を貪り食ひ、そのために人肉の味を覺えて、生きた人間にも嚙みつくやうになつたと噂してゐる者があつた。

だが、さま〴〵な貼紙のうちで、最も私の目に留るものは、NYK航路の出帆日取の廣告ビラである。メルボルン、シドニーとか、シンガポール、ボンベイとか、ネープルス、マルセーユとか、横文字で書かれた地名そのものが、私の心を唆つて、「人間到る所に靑山あり」といふ、年少の頃漢學塾で覺えた古くさい文句を思出させた。「私の思想は大變な放浪癖をもつてゐる」とボオドレエルが云つてゐる。實生活に於ては放浪癖のなさ過ぎる私も、思想に於ては、可成りにはげしく放浪してゐるやうであるが、大抵の人間がさうなのかも知れない。「今日、私は空想の中で三つの栖家をもち、そこで等しい歡樂を見出した。私の魂はこんなに素早く旅をするのに、何故私の肉體を强ひて、場所を移す必要があらう？　そしてまた計畫を實行するとは何の事だらう？　計畫は、すでにそれ自身で十分な歡びであるのに」と、ボオドレエルは云つてゐるが、それは彼れが傑れた詩人の魂を持つてゐたためで、詩人でない私は、計畫だけで十分な歡びを覺える譯には行かないのであ

る。

私は、この土地の爽かな空氣の中を放浪して、ヒマラヤの高原の聖境の味ひを七分の一ほど味つたつもりで、自分の借家に歸るのだが、何時も、留守中に、いやな訪問客の來てゐないこと、いやな郵便物の來てゐないことを希つてゐる。自分の氣づいてゐる範圍でも、氣のつかない領域ででも、いやなことが、輕井澤名物の雷のやうな勢ひで、或は、鼠を捉へんとする、猫のやうに忍び足でやつて來さうな恐れがあるのだが、私は、それを一日でも延すことを希つてゐる。……私がさういふと、臆病者の言葉らしく聞かされさうだが、これもボオドレエルに劣らない外國の詩人がうまく唄つてゐるのだから、馬鹿にはなるまい。

ボオドレエルは、人氣のない廣い公園を散歩しながら、彼女を、善美をつくした宮庭に置くことを空想し、熱帶地方の風景の中に置くことを空想し、しまひには、行當りばつたりの旅館に置くのが却つて彼女に相應しいと空想して、獨りでホク〳〵悅に入つてゐた。私は、「歸つたら、あの續きが讀めるのだ」と、それを樂しみにして、林間の小徑を辿つて丘の家へ歸つて行くのである。讀んでゐるのは英文に飜譯された「源氏物語」であるが、そこに現はれて來る人物は、輕井澤の途上に散見される飜譯的青年男女をもつと美しくいゝ人間に作り上げ、それ等の心々をも描いてゐるやうで面白い。詩人室生犀星君は、「輕井

澤では煙草を吸ふのも贅澤だ」といふことを云つて、この高原で吸ふ煙草の味のうまさを讃美してゐたが、清淨な涼氣のなかで讀む物語の味ひも、下界で讀むのとは、自から異つてゐるらしい。

「浮舟の侍女某は、浮舟に思ひを寄せて何かと世話をしたがる美青年の薫を一瞥して以來、暇さへあれば、夜は勿論、眞晝の日が照耀いゐるところででも、うつら〳〵と薫の面影を夢みてゐた。人間といふものは、自分々々の好きなことを空想してゐられるものだ。彼女は薫に隨いてなら世界の果てまで行つてもいゝ心構へをしてゐた」と、飜讀者ウェレーは云つてゐる。どうせ世の中はまゝならぬものだらけだが、及ばぬ戀でも空想の中では、どんなにでも樂しんでゐられる。源氏の卷々は「滿紙荒唐言」であり白晝夢の物語の連續なりと雖も、人間の心の中に分け入つたら、充足りない薄汚い現實の世界よりも、かういふ白晝夢の美しい世界をひそかに渴望してゐるのではあるまいか。

たとへば、「この世のものとは思はれない」美女は浮舟の姿となつて現はれてゐる。さまざまな男子に思ひを掛けられた彼女が、むしろそれを煩さがつて、入水を企てたり、尼となつて世を避けたりするのは、人間として贅澤な沙汰であるが、さういふ贅澤を享樂し得られる女性が、浮世に幾人あることやら。

若き彼女は、横川の老僧に向つて述懷してゐる。「あたくし、死ぬつもりで御座いまし

た。このお家の皆様は、深切にして下さいますけれど、それでも、あたくしは、死切れないで生返つたことが大變殘念に思はれます。人生に執着を持つてはゐないので御座いますから、今のうちにあなたのお助けを借りて尼になりたいのです。どうぞ望みをかなへて下さいまし。たとひ何時までも生きてゐられましても、あたくし、決して普通の生活はしないつもりで御座いますの。」（英譯者は、普通の生活とは、愛人を有つことなどを意味してゐると解釋してゐる。）

老僧はそれに對して答へてゐる。「お前さんは、さういふ決心をするには、まだ年が若過ぎる。後で考へが變るだらう。道心堅固でない者が佛の道に入るのは、却つて罪に落ちる恐れがある。殊勝な心掛けとして褒める譯に行かないのぢや。お前さんの今望んでゐることは本心から出たことにちがひない。わしはそれを疑ひはしないよ。しかし、何ケ月か立ち、何年か經つても、お前さんが同じ氣持を持續けてゐられるかどうだか。お前さんも御存じだらうが、女人といふものは、不意に思立つたり、後悔したり、隨分氣紛れなものぢや。」

「でもあたくし、不意に思立つたのぢや御座いませんの。小さい時分から、行末は尼になるべき女だと、誰れからも云はれて居りました。子供の時から浮世離れしてゐたあたくしが、年を取つて、本當の苦勞を經驗しますと、人生の皮相な、水の泡のやうな歡樂に背を

向けて、來世の事を一心に考へるやうになりましたのは、心理的に自然だらうと思はれます。氣紛れではありません。でも、あたくしの心は甚だ弱いにはちがひ御座いません。決心がひるまないとも限りません。ですから、今直ぐにも誓ひを立てて佛の道に入りたいので御座います。」

極りなき美貌のこの女性が、かゝる陰鬱な量見を持つてゐることは、横川の聖（ひじり）たる老僧の心にさへ異常の事件と思はれた。浮舟を戀ひしてゐる男子どもが、彼女の覺悟を洩聞いたなら、いかに心を傷ましめるであらうか。

この物語のなかの人物は、男女ともまだ二十にもならぬ前から、花鳥風月のたしなみが豐かで、蟲の聲、木の葉のそよぎ、露の置きどころにも心を動かしてゐるが、それとともに、やゝもすると遁世を志してゐる。青年貴族薫の如き、秀才で美貌で地位もありながら、絶えず、俗界を棄てることを、自分の取るべき唯一の正しい道のやうに云つてゐる。この物語では、花鳥風月と愛慾と、遁世感とを皆んなが享樂してゐる。その三つに陶醉してゐる。"real troubles" とか "torture" とか、彼等が口にしても、二十世紀の今日の現在苦や惱みとは、言葉の內容が異つてゐるやうに思はれる。

私の借りてゐる丘上の家は、夜は寂寥として、周圍に蟲の音が盛んである。時々は何處からかしら、ポン〳〵と太鼓の音が聞えて來る。

「何の音だらう？」
「まさか、盆踊りがこの近所にありさうぢやなし。」
「狸の腹鼓ぢやあるまいか。」
眞顏でさう云つた人もあつた。何かにつけ「物の怪」の振舞を信じてゐたゲンジの時代の人々はさう思つたであらうが、我々は、たやすくさうは信じられなかつた。しかし、狸の腹鼓は信じられなくつても、蟲の音は、ゲンジ以來千年後の英譯を經由して、この物語の男女の心に觸れてゐたやうに、私の心にも觸れるのである。鈴蟲松蟲蟋蟀などの音色を分け得ない私の耳にも、千年の昔の蟲の聲々が哀れを傳へて來るのである。嵐に耐へた龍膽の一本に宿つた露が、靜かな朝の光に耀いてゐるのが、横文字の間に現はれてゐるのである。

若くて美しくて、しかし、神經質の浮舟は、老いさらばうた尼僧と同じ部屋に寢起きをした。それ等の皺くちやの、よぼ〳〵の尼達は、互ひに負けず劣らずに、豚の鳴く音のやうに唸きながら、鼾を立てながら眠るので、浮舟は、猛獸の洞穴にゐるやうな氣がしてゐた。猛獸どもが今にも飛上りやしないか、自分が嚙付かれはしないかと恐ろしくなつた。そんなことを恐れるのも馬鹿なことだと、彼女は思つてゐた。はじめから、この世に恐ろしいものはない筈なのだ。それ等の尼達は、實際は危險な老女ではあるまいが、たとひ、

彼等が野蠻な怪物であつたにしても、何も恐ろしいことはないので、元來、彼女の第一の願ひは、死ぬることではなかつたか。……さう思ひながら、彼女はやはり震へてゐた。……首釣りには丁度誂へ向きの木が河向うにあつたので、或自殺希望者はその木を利用して望みを果さうと企てたのだが、その木へ近づくためには、朽ちた丸木橋を渡つて行かなければならないのが怖かつた。それと同樣に、死を望んでゐる浮舟でも、自分の眼前の世間が恐ろしかつた。

この丘上の家で、勞働に馴れない手足を使役して、よち〳〵と雜務をやつてゐる一人の同居者は、普通の體質を有つた中年の男性であるが、死ぬるのは何でもないことのやうに思つてゐるらしい。行詰つたら何時でも死んで、自分の一生の解決をするらしく傍目に見られてゐる。昂奮もせず、むしろ朗らかな態度で死を語つてゐる。「なに、口先ばかりでそんなことを云つて一種の享樂をしてゐるのだらう」と、人世の經驗者に嘲られさうであるが、その實この男は、綺麗さつぱりと嚢中を費ひはたして一文無しになつた時に、——辛うじて催眠劑の一箱を購ひ得られるだけの金が餘つてゐた時に、つひに時機來れりと感じて、產を傾けて、人生解決の資料たるカルモチンを需めて服用した。その上、念のために動脈をも切つた。完全に息は絕えてゐたのだが、あまり時間の經過しない間に、通りがかりの者に見つけられ、醫師の手當てによつて蘇生したのであつた。石にかじりついてて

も生きてゐなければならぬといふ意氣を缺いたこの男のやうな人間が、身に備はつた何の技藝もなしに、今日の世に衣食の資を得られたら、それは僥倖であるが、その僥倖をもさして期待してゐないで、たやすく生と死を解決してゐるらしいのは、一種の達人であらうか。

ところで、私はをり〳〵この男の過去の影が餘儀なく目に觸れるのを感じる外には、この男の生涯について、進んで訊糺したい氣にはなれなかつた。毎日現實の彼の姿に接してゐると、その半生の經路がどうであらうと、耳を傾けて聞きたい興味は更に起つて來ないのである。

それよりも "Genji" に於ける柏木といふ男の、道ならぬ戀に基く悶死の經路に心が惹かれるのだ。ハムレットよりももつと近代味に富んでゐるらしい薫といふ男には共鳴をさへ覺える。女三の宮、アゲマキ、浮舟など、月宮殿の女人のやうであり、空氣の清淨なこの世のものとは思はれない。二萬尺の高原、カイラースの湖畔にこそ、かういふ美女が影を映してゐるのかと空想されるとともに、この世の女性の眞の姿が自から水の上にちらついてゐるのに、親しみが寄せられるのである。西洋映畫の字幕において屢々見られ、トーキー映畫に於ても屢々聞かれる舊套語、「私はあなたがなくては生きてゐられぬ」といふ言葉が、源氏をはじめさま〳〵な男子によつて語られてゐるのが、この月宮殿の女性のやうな女性に向つて云はれてゐると思ふと、私の机のあたりは、美しい夢に包まれてゐるやうで、甚だのどかである。私は、若かつた昔から、一度もかういふ言葉を口にしたことはなかつた。また、自分の知つてゐる現實の誰れ彼れが、かういふ言葉を口にするのを聞いて、美しく快く感じたことも一度もなかつた。

（昭和八年十月文藝春秋）

旅人の心

私は竹内栖鳳氏の感想を何かの雜誌で二三度讀んで同感したことを記憶してゐる。その一つは、同氏が青年時代にはじめて歐洲に渡つて歐洲の名畫に接した時、それ等に比べると、日本繪は、餘技に過ぎないと感じたといふことである。無論竹内氏も、その後、繪畫道の修業を積むにつれ、東洋美術の傑れてゐることを會得されて、日本獨得とか云ふ神韻漂渺趣味を氏自身の作品にも現はしてゐられるのであらうが、氏が感受性の強い青春期に、「日本繪は餘技に過ぎない」と感じたことは、氏の畫道精進の機緣になつてゐるであらうと想像される。氣品枯淡簡素など、古來の日本藝術の傳統的特長なのであらうが、現代の青年が、早くから芭蕉や西行に傾倒するのは、自己の藝術を伸ばすにふさはしくないと思はれる。若くして「春琴抄」を讃美するのは、必ずしもいゝことではないやうに思はれる。脂つこく豐かに、世間をも人間をも取入れる方がいゝのである。私などは自己の青少年期の枯木寒鴉的生活をむしろ悔悟してゐる。早くから東洋趣味なんかに捉はれて、風韻を發揮したりしてゐると、その人の藝術は榮養不良に陷るであらう。

竹内栖鳳氏は養痾のため湯河原溫泉に滯在してゐた時に、「住宅は小さい安つぽい作りがよろしい」と云つてゐた。座敷の中まで日が差すやうなのがいゝ。直に自然に接しられ

るやうなのがいゝと云ふ意味であつた。これにも私は同感である。竹内氏などは大きな家に住飽きてゐるためにさう思はれるのであらうが、數奇を凝らした日本家屋は日當りが惡く、且つ起居するに、あたりを傷つけまいとする用意が、私には煩はしいやうに思はれる。いゝ日本服を着け、いゝ日本家屋にゐると、人間が衣服や住宅の奴隷みたいになりさうである。

大きな家を作るのは、必要よりも、他に誇らんとする人間の本能に基くのであるが、背負つて歩く殼は、重いよりは輕い方がよい。人生行路に、身輕といふことは何事につけてもいゝことである。アパート生活は日本でも次第に發達するであらうが、今のところ、アパートはまだ設備が不完全なやうである。いゝ歳をした男が一軒の家も持たず、アパート住ひなんかをしてゐるとか、妻帶をしないでゐるとかすると、一途に甲斐性なしのやうに思はれがちであるが、さういふ因襲に捉はれた處世觀から脫却して、自由に生活し得られないものであらうか。昔、島村抱月氏は、自己の體驗に基き「文士無妻論」を唱へたが、私は、最近來朝した佛國の小說家デコブラ氏の「獨身讃美說」と對比して、興味を覺えた。年齡五十に達してゐるデコブラ氏の所說は明るくて、若かりし頃の抱月氏の所說は陰鬱だつた。妻子を持たず、一軒の家も持たずして、人生の眞相が分るものかといふ非難は當を得てゐるであらうが、逆に、早くから妻子や家の重荷にひしやがれて、生活の萎けた者から

いゝ文學藝術が生れるかと云へないことはない。

財力が豐かで、大きな家に主君然と收まつて、大勢の使用人を自在に顧使してゐられゝばいゝかも知れない。多くの兒孫に取圍まれて敬愛されるのは人生の幸福であるかも知れない。文學藝術の先輩として、多くの崇拜者を左右に集め謦言を呈せられるのも愉快である。しかし、さういふ境地に、本當に心の自由があり發展があるであらうか。老衰の行留りがそこに見られるのではあるまいか。

上司小劍が、かつて世間話のうちに洩らしたことがある。「下町の裏通りの小さな借家に獨りで暮してゐたい」と。これも、家庭生活を好まないらしい小劍氏の空想語であつて、歳を取つての獨り者の裏棚住ひなんか、現實の生活として決して結構なものではあるまいが、私も空想として同感である。近松秋江氏が、昔田中王堂先生から聞いたと云つて、「賢人はホテルに住む」といふ、外國の諺らしいものを知らせてくれた。アパートと同樣、日本には完備したホテルは乏しいが、需要があつたら、次第に日本にも住心地のいゝホテルが殖えるだらう。帝國ホテルのやうな名前の嚴めしい第一流のホテルでなくつても、二流三流四流のホテルででも、氣輕に快く住み得られる時代が來るかも知れない。西洋の實例

を見て推察される。かつて藤森成吉氏が伯林のホテルの住心地のよさを書いてゐたのを讀んで同感したことがあつたが、日常生活に付纏ふ煩はしさから離脱して日を過ごされるのがいゝ。藤森氏の云つてゐたやうに、鍵の穴から外を見てゐるのもいゝ。島崎藤村氏は、芭蕉の心境を憧憬し、旅人の心で人生を過ごしたいと云つてゐられたことがあつたが、私は、餘儀なく一つ所に定住してゐても、心はつねに旅人の心である。

文學には傳統を重んじなければならぬと云はれる。重んじても重んじなくつても、作者自身意識しても意識しなくつても、傳統から全く離れることは困難であるが、自分で好んで傳統に捉へられようとする氣持は、私には皆無である。フランスなんかでは、藝術の方面で古來の傳統が力强く、その羈絆を脱して飛躍することは容易でなささうであるが、日本ではまだしも身輕である。少くも文學藝術の範圍内では、旅人の心をもつて自分の好む者を翫賞し、自分の好みに從つて製作してゐられさうである。實際に於ては何も出來ないにしても、空想に於て、私はさういふ態度を採ることを樂しみとしてゐる。

現實に於ては變化のない單調な生活を過ごしてゐる人間、變化はあつても不愉快な變化しか經驗し得ない人間は、よく空想を描きたがるものである。私は銀座を散歩しながら、或は喫茶店に休息してコーヒーでもすゝりながら、或は夜更けてホテルのロビーの隅つこに身を置きながら、心を現實の外に勝手に遊ばせることが多い。故郷を偲ばずして異郷を

夢む。旅行家大町桂月氏が、旅行も究極するところは机上旅行でいゝと云つたことがあつたが、私は、白晝机の上に世界地圖を置き案内記を置いて、旅費のいらない空想旅行を試みることがある。何事でも實現する努力を忘れて、空想に浸つて足れりとするのは、心身衰弱の兆とも見らるべきであらうか。

空想惑溺實現力稀薄な私は、創造的精神の旺盛な實行力に富んだ外人メーソン氏を自分と對照して大に興味を感じてゐる。氏夫妻とは同じホテルに滞在してゐるため非常に懇意になつたので、外國の風俗習慣、日常生活のさま〴〵を聞かされるのも面白いが、それよりも、氏の耳目と頭腦を通して日本の語られるのが、私の好奇心を刺戟してゐる。氏は、毎夜、必ずその一日の見聞、行動、感想を私に報告するのである。率直に明快に、隱すところなく(それは私の誤信か知れないが)語るのである。

氏は二年近くも日本に滞在して神道研究を主要な目的として、諸方を旅行し、日本を去るに當つて、研究の結果たる名著を殘したのであるが、氏が月本の神道に關して獨創的見解を施したことは別問題として、氏が日本渡來についての用意、滞在中の社交振りなど、水も洩らさぬ手際に私は感心してゐる。それよりも、日本人は、歐米人に對して一目置いて接してゐることを、世間の狹い私は、今度はじめて知つて驚嘆してゐる。「過ぎたるは尙及ばざるが如し」と、東洋の聖人が云つてゐるが、ホスピタリチーも度を守るべきだと思ふ。岩野泡鳴が古神道を研究し唱道した時は何の反響もなく、むしろ物笑ひの種子となつた。泡鳴は研究が粗漏で、物を理論化する力も乏しかつたが、多少の創意もあり熱誠でもあつた。この泡鳴が昔よく云つてゐた言葉に、「たゞ西洋へ行くのはつまらない。自分の獨創的意見を西洋の新聞か雜誌に寄稿して、豫め自分を認めさせて置いてから出掛けなくてはならぬ」と。それで彼は渡歐の資力はありもしないのに、外國におのれを認めさせるために、英文で何か書いて、野口米次郎氏に周旋を依頼したことがあつた。無論泡鳴の英文なんか成つてゐないので、西洋の同人雜誌にだつて出してくれやすまいが、泡鳴の向う見ずの「日本第一」信仰は今日から見ると面白いと思ふ。

メーソン氏は、空想家泡鳴とは異り、着々として自分の意圖を實現し、效果を收めてゐる。氏が日本に對して好意を持つてゐるため、また氏の見解がノーマルで、略的確であるためではあるが、先進國から敎へを受けるといふ明治以來の風習が、日本人の頭にまだ存在してゐるためでもある。「日本人が歐米へ行つて、英國古代の精神を論評したつて相手にされないだらう。アメリカ精神を說明したつて、誰れも眞面目に聞きやしないだらう。日本は不思議な國だ」と笑つた外人があつたが、日本人は外面が惡いため排外的に見られ

てゐるものの、實際は他の說を容れるのに寬大なのである。

西洋人とはいくら親しくしても心の底では離れ〳〵であることを私は感じて、東西融和の眞の困難を私はます〳〵感じてゐる。その代り外人との交際は後腐れがなくつていゝ。互ひに深刻の他の腹を索合つたりする恐れがなく、その場限りの旅人同士の交際で、互ひに變つた話を聞いたり聞かされたりして「左樣なら」を云ふのだから氣輕だ。

メーソン氏は、私よりも日本內地をよく旅行してゐるが、私などが見たくても見られない所をちやんと見てゐて、私に話してくれる。私は氏によつて未知の日本をいくらか知ることが出來た。また社交の狹い私は、氏によつて、方面の異つた知名の日本人に紹介された。さういふ時には、旅行先で日本人に會つてゐるやうな感じがして面白い。

私の身體は何處にゐようとも、心は今なほ一定不動の所に居據らないで、放浪の旅をつづけてゐる。

（昭和九年二月讀賣新聞）

西鶴について

暫らく「西鶴」を讀まなかつた。また、讀みたいとも思はなかつた。西鶴に關する感想を頼まれたので、不承々々に一二册讀直して見ようと決心して、歸省のための夜汽車に乘る前に、銀座の書店で、岩波文庫の「胸算用」と「五人女」とを買つた。大晦日の夜であつた。その日、中村白葉氏譯の新刊「チェーホフ全集第一卷」が寄贈されたので、それをも携帶した。

夜汽車は意外にも閑散であつた。寢臺はガラ空きであつた。伊勢へ初日出でも見に行く人は、もつと早い汽車で出立したであらうし、普通の人は汽車の中よりも、自宅で元旦を迎へようとするのであらう。だから夜汽車は閑散なのは當然なのだ。大晦日の夜の乘合舟の旅人が互ひに取かはす身の上話は「胸算用」のなかに面白く寫されてゐるが、汽車の中では、皆んな自分々々の浮世を胸一つに收めて寢てゐるだけである。その代り、昔の乘合舟は夜風が寒かつたであらうが、今の夜汽車はホカ〳〵と溫かい。實生活に於ては、風流人好みの情趣よりも、物質文明アメリカ文化の有難さを、我々は感じる。「衣食住の三つの樂み極めんとぞんじ」などと、西鶴は、至るところで慾望の滿足を說いてゐて、元祿時代の享樂主義の代辯者のやうに云はれてゐたが、しかし、あの頃の贅澤は今日に比べて高が

知れてゐる。

私は、「大晦日の胸算用」の經驗がないばかりでなく、近年世間並みに、元旦を祝した經驗もない。帝國ホテルの食堂で、外人並みに屠蘇を一口飲まされ、小指の先ほどの雜煮餅を饗せられるばかりであつたが、今年の元旦も、汽車の食堂で、オートミールやトーストで朝食を取る前に、屠蘇を一口飲まされただけで、獨りで、「新年の御慶申收め」たのであつた。そして、チェーホフを讀み、西鶴を讀んだ。どちらも面白い。この二人の作品にはいくらか似てゐるところもある。

私は、年末に、新派の中堅俳優の組織してゐる新劇座の所演を、ホテルの演藝場で觀た。築地座の、「チェーホフの三人姉妹」をも觀た。新劇座では、三つの出し物が三つとも面白かつたが、そのうちで、岸田國士氏の「雅俗貧困譜」は大晦日の胸算用を描いて、日本趣味の飄輕なところが出てゐて、面白かつた。西鶴には連歌の味があると云はれてゐるが、岸田氏のものにも日本傳統の連歌味が、作者の意識しない間に、自から加はるのであらう。「三人姉妹」は、かつて小劇場で觀た時ほどに感ぜられなかつたが、これは、飜譯劇そのものに對して、私が飽足りなく思ふやうになつてゐるためであらう。演技には不感服だが、作品そのものには、いつ見ても心に染みるところがある。「櫻の國」にもあるが、誰れにも忘れられてゐる老人がチェーホフ作中にはよく持出されてゐる。「人間は存在してゐるの

ぢやない、存在してゐると思つてるだけだ」といふやうな考。三人の姉妹が柵に寄り泣顔を並べて、遠く消え行く人生の足音を聞いてゐる幕切れなど、西鶴慣用の常識的訓戒語なんかに比べると、厭世調が濃厚で、諸行無常はチェーホフの作品に於てこそ一層つよく感得されさうに思はれる。翻譯集第一卷の卷頭に置かれてゐるビーリスキーのチェーホフ小傳によると、この作家は、「徹頭徹尾不眞面目かとも見える日頃の戯談や氣散じのかげから、自分を示すことの極めて珍らしい人」であつたさうだが、我々が作品を通して見た彼れは、現實の人生を心細く見た氣の弱い人間であつた。それに比べると、西鶴はふて〳〵しい人間であつたらしい。チェーホフの小説を考へると、「棺桶屋」といふ短篇が眞先に心に浮んで來るが、これに比べると、「胸算用」中の人物なんかは、しやれつ氣があつて明るい。

私は、西鶴の作中では、「萬の文反古」と「置土產」とを、最も愛好してゐたので、今度も、歸鄕後に鄕家の藏本によつて讀直したが、ますます〳〵面白い。かういふ名作を讀むと、新年號の雜誌小説のまづさが思當る。冴えた筆で簡潔に、要領を捉へてサク〳〵と敍し盡す腕前は無類である。生活難を書いても、ごた〳〵くど〳〵と、齒切れの惡い文章で書續けるのは、小説として下手の行留りのやうに思はれる。ある時代の社會相人間生活を廣く深く描敍した作家は、日本に於ては西鶴に及ぶものなく、日本のバルザックと云つてもいゝだ

らう。作風の著しく異るのは、日本趣味と西洋趣味の相違に基くのだが、西鶴は自分の好みに從つて、「人間喜劇」を書殘したのだ。彼れの寫した數百年の昔の人間の姿はそつくり今日の人間の姿なのだ。

「京には思ふやうなる事なし」と題された書翰の發送人は、十七年のうちに二十三人も女房を持替へた。これは異例である。西鶴の浮世話のかず〳〵は、現實の有りのまゝを傳へてゐるとは云へ、有りのまゝのうちの異例を取入れてゐる。そこが明治の自然主義文學とは異つてゐるので、凡庸生活も强調されてゐる譯だ。吝嗇も榮華も、その頃の實際の激しいところを見つけてゐる。「來る十九日の榮耀獻立」にしても、當時の最上の料理を並立てたのであらう。料理でも衣服でも、金錢でも、色道の極意でも、西鶴は世間智に富んでゐて、その作品は一面風俗史であり經濟記錄である。

二十三人も女房も取替へたのは異例であるが、その內容は異例でない。その男の心理は異例ではない。世間有勝ちのことなのだ。「惣じての女、をとこを持申す事一生の身過づくに御座候」とあるのは、いつの世でも同じことだが、男がどんな女房を娶つても思ふやうに行かないのも有振れたことである。さりとて「獨りでは暮しがたい」のである。「爰元女の隨分たくさんなる所にて、緣組と申すからはおもふやうなる事御座なく候」は、古今同樣である。取替へた女房のうち五六人の人となりを、實例として說いてゐるが、今日の

女氣質にピッタリ當嵌るやうである。最初の女房は、「つね〳〵悋氣いひつのり候に、ふつふつ顏見ることもうたてく」て捨て置いて、男の方から他鄕へ逃げ出したのだが、或女房は、かつて悋氣いたさぬのを不思議に思ふと、男を嫌つてゐるのだ。男としてそれが口惜しくて强ひて離別もせずにゐると、女の奴、わざと浪費をして男にいやがらせる。「毎日湯わかして水へ入るごとく」と、それが浪費となつてゐるが、して見ると、元祿時代には、毎日の入浴が贅澤になつてゐたのであらう。「手にも足にもさはる所にて費え」は面白い表現である。「兎角年の行きたがる世帶藥とぞんじ」案外な婆さんを娶つて興を醒まし、世間知らずの藝術家氣取りの女に弱らされ、妹だの姪だのと、かゝりもの八九人もある女に懲々し、「月に二三度づつ亂氣に」なるヒステリ女に迷惑さされた。

この男は、一人でいろ〳〵な女氣質を體驗したのである。それで、無一文になり、「もはや女房持申候氣力も御座なく候」となつた。ほそ〳〵と其日暮しをしながら、死にもやらず。それほどの悲しき身になつても、最初の女に對して微塵も心殘りを覺えず、「京も田舍も住みうき事少しも變らず、夫婦より合ひ過ぎとぞんじ候」と、女といふものに全く幻滅を感じてゐる。「我等死んだ者分になされ、御たづね御無用に候。若し命ながらへ申候はゞ、坊主になり修行にくだり可申候」と書收めてゐるが、この手紙讀後の感じは悲哀に打たれるといふよりも心の澄むやうな氣持である。

文學者の書翰は作品よりも却つて面白いと云はれることがある。書翰には筆者の思つてゐることがすら〳〵と述べられ、作爲の跡がないので、その人の眞面目が見られる譯である。チェーホフやドストエフスキーの書翰集が珍重され、研究に價ひしてゐるばかりでなく、賴山陽や夏目漱石の書翰集も、我々の興味を惹くことが尠くないのである。

「萬の文反古」は、西鶴自身が知人に與へた手紙ではなく、當時のいろ〳〵な人間に賴まれ代筆した手紙みたいなものであるが、書翰としては、古今無類の名品であらう。書翰體の小說は西洋には甚だ多いが、それ等の多くは、長さも長く、全體が書翰の體裁を用ひて小說を書いたことが見え透いてゐる。國木田獨步の書翰體小說だつて、かういふ形を採つた方が便利だと思つて、手紙文で小說を書いたのに過ぎない。ところが、西鶴のは、はじめから手紙を書かうとして手紙を書いたので、「一代男」「一代女」その他の如き者を手紙體で書かうとしたのではなかつた。或人間が或知人へ消息した文だけなのだ。そして、その手紙に、人生がちやんと映つてゐるのである。

「代筆は浮世の闇」「人の知らぬ祖母の埋め金」の如き手紙は、さら〳〵と書流されてゐるうちに、讀めば讀むほど味ひが出て來るやうである。チェーホフのも無論面白いが、第一卷は初期の作品であるためか、また譯文が流暢であつても、原文の妙味が日本文學では現はれかねるためか、「萬の文反古」のやうに含蓄がない。兎に角、チェーホフほどの人を向

うに廻して見劣りしないやうだから、西鶴はえらいと云つていゝ。

「置土産」では、「愛宕颯の袖さむらし」と、「人には棒振蟲同然に思はれ」が、いつ讀んでも面白い。「愛宕颯」を、二十三人も女房を取替へた男に比べると、西鶴の人生觀と云つたやうなものが見えて可笑しく思はれる。昔全盛を極めて、世の人のするほどのこと爲盡した大臣が零落して、世を隱れた貧しい生活を立てながら、ある日愛宕參詣を思立ちて出掛けた途中、ふとした出來心から、吝な遊びを企て、「物まゐりの精進を打破りて、木綿寢具にわびながら、太夫に逢ふ心地して、又下向にもたはぶれ、御初穗の殘りをありぎりに取らせ、山崎より舟賃なくて、ひろひ草鞋の歩行路、中食無しに歸り」是ほど懲りて此身になつても、やまぬものは好色と逢ふ人ごとに語つてゐる。つまり、女を娶つて世帶を持つても、とても思ふやうには行かない。たゞ女を相手の遊蕩が面白いのだ。だから、西鶴は、「一代男」や「一代女」をはじめ、屢々遊蕩讃美の筆を揮つてゐる。「五人女」のやうに町家の女を描いても、遊蕩の相手としてのみ女に價値があるのだ。西鶴が屢々常識的處世訓を云つてゐるのは、德川末期の戲曲者が勸善懲惡をにほはせてゐるのと同樣で、因習に捉はれたものに過ぎない。日本の作家で、勸定高くつて、金錢の事をよく書いたものは、西鶴に留めをさすのであるが、色慾讃美もこの作者ほどのものはない。人間の本心を見たと云へるが、代表的俗物でもあつたのだ。「武道傳來記」のやうな作品もあり、當時の武士氣

質がいろ〳〵書かれてゐるが、かういふ作品には、好色本や町人生活小說のやうに、作者の筆が冴えてゐない。面白い材料は何でも取入れて賣物にしただけで、作者が心底から共鳴してさういふものを書いたのではない。

西鶴は近松のやうな感傷家ではない。チェーホフのやうに人生に不滿を感じて形影相憐れんでゐる藝術家ではない。彼はふて〳〵しい俗物のやうに思はれる。「人生がどうだかうだと泣言を言つたつてはじまらない。浮世は、要するに色と慾だよ。それつきりだ」と、胡坐を掻いて嘯かれると小憎らしくなるが、しかし、俗物西鶴が、人間を見る目が冴えて、描寫の筆の自在であつたことには驚かれるのである。西洋でも日本でも、文學者の傳記を書く時には、その文學者を上品な人間に仕立てたり、博愛家に祭上げたり、凡人以上の深遠な思想家らしく吹聽したりするのが常例であるが、文學者と俗人の相違は、多くは、文筆の傑れてゐること、人間を見る目の傑れてゐることだけに由る場合が多い。それでいゝのだ。今度、チェーホフ傳を讀み、この作者が横範的人物らしく書かれてゐるのを見て、まさかそんなでもなかつたであらうと感じたが、西鶴についてもさう思ふ。彼は負けん氣のふて〳〵しい男で、金勘定の細い、女好きの、現代の大阪人によく見るタイプの男であつたと思はれる。だが、本當の人生は、西鶴の見た通りのもので、それ以上でも、それ以下でもないのかも知れない。「懷硯」のやうな諸國ばなしを讀んでも、聞いたことを事實ら

しく鮮明に敍してゐて、後世の作家の「諸國ばなし」のやうにあくどく荒唐無稽化したところが少い。怪異談は筆者當人がはじめから馬鹿々々しいものとして書いてゐる。西鶴は取材の範圍が廣いが、彼れ、如何に社交が廣く、世間の珍らしい話をよく聞いたにしても、筋道の立つた話がそんなに澤山聞ける譯はないので、ちよつとした噂を、西鶴の頭で整理して面白さうに書いたのであらう。

現代の日本の作家は、社交が狹いから、取材の範圍が狹小だと、以前から非難されてゐるが、西洋の作家だつて、社交によつて無限の異つた材料を仕入れてゐる譯ではあるまい。一を聞いて十を察する才分の有無に關係があるのだ。想像力の豐富と稀薄とに原因してゐる。

（昭和九年二月文藝）

欠

文藝院について

欠

文藝院の創立が企てられてゐる。文壇で文藝復興の聲が聞かれてゐる今日、政府から進んで文藝奬勵の機關を建設されようとしてゐると聞くと、お目出たいことだらけで、無論文壇人として喜んで迎へなければならない。それに拘はらず、かういふ消息を聞かされた時の私の頭は陰鬱であつた。「文藝復興」も、作家の內部に創作力が汪盛でない限りは、空念佛に終るであらうが、「文藝院」も純眞に文藝を尊重する心から企てられるのでなければその效果について最初から疑ひがさしはさまれるのである。

西洋もこの頃は、「文藝復興」や「文藝院創立」の氣運の萌すやうな泰平無時の世界ではなささうだ。舊帝國時代のロシアの文人が革命後に彈壓されて、流離の苦をなめたやうに、現代のドイツの作家でナチスににらまれたものは、容赦なく追放されてゐるさうだ。秦の始皇以來、學者や文筆家の類は、爲政家に取つては厄介なものであるらしい。

德川時代の文學取締りも可成り峻嚴なものであつた。政府の施政方針に反抗するやうな大外れた考へは鵜の毛ほども持たず、浮世の姿を面白可笑しく書いたに過ぎない作家に對しても、何とか難癖をつけて、手錠をはめたり、閉門させたりして虐めた。水野越前守は始皇のやうな橫暴な膽力を有してゐたのではなく、始皇が十把一からげで燒却した孔孟の

經書などは尊重してゐたらしく、從つて四書五經の敎へに背かぬやうな作品なら、たとひ卑しむべき戲作者の筆に成つたものでも大目に見て許してゐた。曲亭馬琴なんか、御時世にうまく步調を合せて刑を免れてゐた。

明治以來、西洋の風習が輸入されて戲作者も役者も、藝術家として、以前のやうに肩身の狹い思ひをしないで生きてゐられるやうになつたが、國家の保護を受けたことは、今まで皆無であつた。俳優は別として、明治以來最近まで、文學者といふ文學者は大抵は貧乏であつた。自業自得でそれも仕方がないのだが、與謝野晶子女史が先日、本紙のどこかでいつてゐたやうに、文學者の作品は、作者自身が氣づかぬうちに切取られて、いろ〳〵な敎科書の中に挿入されて、國民敎育の上に大なる役目を果してゐるのだから不思議だ。大骨折つて鷹の餌食か。

あれも二昔あまりも前のこととなつたが、西園寺公が、當時の重な文學者十數名を招待したことがあつた。會は雨聲會と名づけられて、數回續けて催された。總理大臣に招かれて御馳走になつたことくらゐが、明治文學史の珍らしい一事件になるなんて、西洋の文壇人に聞かせたら不思議に思はれるであらう。それほどに日本の文學者の社會的地位は低か

つたのである。しかし、雨聲會は單なる風流の會合であつて、西園寺公は水野越前守のやうな無粋な沒分曉漢ではなかつた。招かれた文學者も快く談笑したらしかつた。

私は招かれる資格はなかつたが、もし何かの間違ひで招かれでもしたら困ると杞憂を抱いてゐた。當時は禮服を持たなかつたが、衣服は借りるにしても、私は行儀作法を全く心得てゐないから、高位高官の士の前へまかり出ることに氣おくれがされた。自分の趣味としても嫌ひであつた。（今も同斷）

雨聲會は何の意味もない會合であつたが、小松原英太郎といふ人が文部大臣をしてゐた時分に、文藝委員會とか何とかいつたやうな名目の下に、幾人かの知名の文學者が會員に選ばれて、文藝奬勵が企てられた。多分、官憲の力で美術展覽會を起したのだから、文學の方を閑却したら片手落になると思つたためであらう。小松原氏にしろ、この會に力を添へた當時の內務大臣平田東助氏にしろ、文學に對して大した理解も同感もあつたわけではなかつたと思はれるが、しかし、水野越前のやうな腹で文學を取扱はうといふ考へは、毛頭なかつたやうであつた。緬羊の皮を被つた狼が、ひそかに牙を磨いてゐたのではなかつた。

それで、この會合は、多少有意義のものではあつたが、文藝奬勵の方はうやむやに終つて、ゲーテ、ダンテ、セルヴンテスの飜譯費支出、沙翁飜譯に對しての坪內博士表彰くらゐなところで、會は廢止された。廢止された主な理由は、それに必要なだけの費用の豫算が取れなくなつたためであらう。美術展覽會のやうに利益が得られるやうであつたら、この文藝委員會も何等かの形を取つて持續されてゐたかも知れない。

その後何十年か經つた今日、新たに「文藝院」創立の計畫が發表された。そのこと自身は結構であるといつていゝが、氣遣はれるのは內容である。純眞なる文藝奬勵ならいゝが、官憲の意志によつて何等かの拘束を加へたかつたための思ひつきなら、文學者に取つては有難迷惑である。保護されなくてもいゝから、せめて邪魔をしてもらひたくないといひたいやうな場合が、世間には多いのである。日本では西鶴が古今第一の小說家であるとは、文學者間の輿論といつてもいゝが、その西鶴の傑作は出版を禁止されてゐる。

外國の鑑賞家をさへ感動させてゐる非凡の大作「源氏物語」も、上演を禁止された。上演禁止問題は別として、本物の「源氏物語」を、今の檢閱官が熟讀したなら、早速出版禁止の命令を下しはしないかと私は想像してゐる。これが學校の敎科書になつてゐるのは不思議

である。六ケしくて、普通人に讀まれないために災厄を免れてゐるのであらう。

世に絶對の自由はない。國家取締の任に當つてゐる者が、自分の見解に基いて、西鶴を禁止したり「源氏」の上演を禁止したりするのはやむを得ないかも知れない。しかし、禁止されても傑作は傑作である。全體、官慮の好みに投じた文學で、文學として傑出したものがあつたであらうか。「思想善導」に利用される程度の文學に、文學者が甘んじるやうだつたら、明治以來の文壇の先輩が貧窮の間に努力して築き上げたものも、退却することになる譯だ。……純眞の文學魂に照して見ると、今度の「文藝院」は、昔の「雨聲會」や「文藝委員會」のやうに、無邪氣な姿を帶びて現はれては來ない。むしろ薄氣味惡く思はれるが、それは私のヒガミであらうか。

年々の新しい傑作を表彰し、奬勵金を與へるといふ案は、人聞はいゝが、これがなかなか難問題なので、「文藝委員會」の時にも奬勵作品の豫選だけで實行には到らなかつた。雜誌社や新聞社の懸賞募集とは異り、多少でも國家を背景にして、作品の價値を極めるとなると、事が面倒になる。文壇の口も煩いだらう。「朝日賞」でさへ、まだ純文學を眼中に置いてゐないやうである。繪畫や音樂や、學究の著書とは異り、文學の傑作には、俗界の標

準と相容れないところがある。假りに私が作品審査の任に當つたとして、谷崎潤一郎氏の「春琴抄」を、近來の大傑作として推薦したらどうだらう。文壇にも反對論が起るであらうが、世間の非難は一層激烈であらう。新作家の奬勵にしても、どういふ作法が將來伸びて行くかは、數十年來文學修業を重ねて來た私にさへ全く見當がつかない。優秀なる新作家の選拔が造作なく出來ると思ふなら、それは甚しき認識不足である。

彈壓一點張りでは可愛想だから、出來る範圍において、文學者の便宜も計つてやらうといふのなら、大衆小說的用語「お上のお慈悲」の現はれとして、日本はまだ現代ドイツのやうではなく、泰平の風が吹いてゐることを認識して、文壇人もいくらか安心してゐられる譯であらう？

「文藝院」のやうなものを、巧みに運用して、文壇全體の利益を計るにはどうしたらいゝか、私にはいゝ考へが浮ばない。計畫參加者にはいゝ思付きがあるのかも知れないから、私は興味をもつて傍觀してゐよう。

（昭和九年二月朝日新聞）

明治劇壇總評

——予が感化されし演劇について

一

晩年のボードレールは、「嗚呼、香氣馥郁たる樂園の道は遠し矣」と歎じてゐる。ヴィナスの住むといふ悅樂の島への旅を辿つた彼れも、心身の衰頽には勝てなかつた。そして、つひに、「その悅樂の島にて、象徴の絞首臺に自分の姿がかゝつてゐる」のを見なければならなかつた。

「象徴の絞首臺」(Gibet symbolique) の意味は、私にも朧ろげながら感ぜられないことはない。中世紀の人々には、現實世界は、人間の窺ひ得られない神の眞智の象徴に過ぎないものと思はれてゐた。實生活は影であり、幻であつて、眞の事實は天の彼方にあると思ひて、絶えず憧憬してゐた。しかし、西洋人並みにカソリックの信仰を胸裡に潛めてゐたボードレールも、中世紀ならぬために、天の彼方には「象徴の絞首臺」を見てゐた。

私は、十歳未滿の幼時に、大阪見物に連れて行かれて、その時、知人の案内で、道頓堀の角座の芝居を觀せて貰つた。右團次(後の齋入)一座の「佐倉宗吾」の悲劇が演ぜられてゐたが、私が最初に觀た都會の演劇として、心に深く感銘されてゐる。今それを思出してゐると、見物席の正面に掛つてゐた大きな八角時計が先づ目に浮んで來る。當時(明治二十二年頃)は時計といふものが珍らしいもの、不思議なもののやうに思はれてゐた。その時計が

十二時を打つとともに幕が開いた。百姓一揆が嚴めしい門の前で騒いでゐた。「嗷訴」だと云つて、傍人がその意味を説明してくれた。「この頃のえらい役者は、團十郎菊五郎左團次、その次がこの右團次である」と、その人が、幕間に教へてくれた。佐倉の殿様の狂亂の場、清水堂のやうなところで、惡漢が茶店の女を相手にしたエロチックの場、渡し場や子別れなど、夢幻の如き光景が幕から幕へ續いたが、最も強く私の心に印象されたものは、最後の磔刑の場であつた。縛られた親子が兩花道から現はれて、舞臺で慘酷な刑に處せられた。近親者と云はれた男が、梟首臺から首を奪つたが、それを邪魔立てした刑場の番人は、蛇にまつはられて、血を吐いて、のた打ち廻つて死んだ。「かういふものが芝居であるか」と、私は、幼な心に演劇に對して恐怖を感じた。恐怖を感じたために芝居がいやになつたかと云ふと、決してさうでなかつた。むしろ觀劇慾を旺んにそゝられた。現實よりも却つて恐ろしい象徴の世界、象徴の梟首臺が、奇怪な興味を起させるのである。右團次演ずるところの佐倉宗吾の磔刑は、それが正義の結果であらうとも、惡の表現であらうとも、幼い私には批判の外であつて、たゞ人生を象徴したものとして映じたのであつた。キリストの磔刑やセバスチアンなど殉教者の慘酷な磔刑の繪畫が鑑賞された心理も推察される。

私は早稲田の講堂で、「オセロ」の講義を聽いてゐた時、フランスでは、デスデモナの如

き純良な女性がむごい最期を遂げるのを見物が見るに忍びないで、ある時は、見物中の婦人が卒倒したことさへあつたので、原作に補修を加へて、デスデモナは、しまひに夫の疑ひが晴れて、死を免れたことにして演ぜられたと、師の說かれるのを聽いて大いに感動した。フランス人の心の柔しさ、神經の微妙さを想像し、これでこそ文明國だ、日本は野蠻だと自卑の念を起してゐた。しかし、今の私はさうは思はない。佛蘭西革命史を讀むと、當時の巴里人は、王や、王后をはじめ、右翼左翼のさま〳〵な名士が斷頭臺に送られるのを、興行物のやうに面白がつて見物して、路傍には飲食物をひさぐ露店が出てゐたほどであつたと說かれてゐる。ある伯爵夫人は、獄中で、五人の貴婦人と室を共にしてゐたが、夜、この人々のうちの一人が籤を引いて罪人となつて、革命裁判所の眞似をして、最後はベッドの下に、枕にてギョッチンにかゝるところまでを演じたさうである。明日は我が身にふりかゝる死刑を、淑女の身のあられもなく、一場の遊戲と弄んでゐたのであつた。ここでも、「象徵の梟首臺」を一つの人生詩として浮べる人間の不思議な心理が伺へるではないか。あの大革命の動いてゐた恐怖時代であつたから、特に人間の心がすさんでゐたのであらうが、トルストイの傳を讀むと、彼れは、青年期に巴里に遊んだことがあつたが、連日名所古跡の見物をして樂しんでゐたところ、ある日、知人の勸めで死刑場の見物に行つた。巴里人は子供まで連れて行つて罪人の身首所を異にするのを見てゐた。ある父親は同

伴者たる少女に向つて、「どうだ、あの機械は、小氣味のいゝほどよく切れるぢやないか」と云つてゐた。トルストイは、ここに西歐の假面的文明を認めて憎惡を感じて、早速巴里を退去したさうである。現代に於ても、歐洲人の心理狀態が異つてゐるとは思はれない。ロンドンにあるマダムチュッソーの人形陳列館の地下室には、古來のさま〳〵な刑罰の有樣が、人形仕立で如實に現はれてゐるが、拷問にかけられたもの、眼を抉取られたもの、饑死に瀕したものなど、我々でも正視出來ないものが、多數者の觀覽に供せられてゐるのだ。そんなものを觀馴れて育つた人間が、デスデモナの舞臺上の死くらゐに驚きさうには思はれない。

私などのやうに、明治の初期に日本に生れた人間は、讀書の方では、「日本外史」や「八犬傳」のやうなものによつて、思想や感情や趣味を養ふのを常例としてゐたのである。私は、明治の初期と云つても西南戰爭後の生れであり、キリスト敎系統の舶來趣味にも早くから感染したのだから、頭腦の色彩がいくらか違つたのであらうが、私よりも、一時代早い出生兒は、も一層つよく「日本外史」と「八犬傳」の感化の下に育つたのだ。書物を讀んでも讀まなくつても、この硬軟二種の書物に含んでゐる思想、情調の虜になつた。新代の文明開化や自由民權說に心醉し、感激し、片言の英語を盛んに振廻して得意になつてゐたにしても、根柢には「日本外史」趣味、「八犬傳」趣味が潛在してゐた。「忠ならんと欲すれば孝な

らず、孝ならんと欲すれば忠ならず。重盛進退ここにきはまる」云々と、一種の節調をもつて音讀して、爽かな感じを起すやうな文章鑑賞癖をつくられた。「冬ごもり、北山おろし吹く時は、風のたよりに知らせてたべ。筑波の山の彼方には、君しいますと聞く時は云々」といふ、濱路の口說などが、快く耳に響くやうに習慣づけられてしまつた。團十郎の活歷劇は、時代相應の「日本外史」趣味なのだ。舶來の文學や音樂が、陸續として產れ出る新代兒から新代兒へと、濃厚な感化を及ぼし來つたので、現在の青年は、舊文章の音調美からは何の快感も得られなくなつてゐる筈なのだが、それでも、年の若いくせに、三十一文字を弄して自己の所感を表現したり、十七字詩の形式で、自己の藝術を創作したりするもののあるのによつて見ると、案外、國人の心にまつはる文字や音調の執念は深いものらしく思はれる。芝居の臺詞だつてさうだ。あの舊劇の臺詞のマンネリズムが、劇的感興を起すやうに、我々は幼時から慣らされてゐる。しかし、このマンネリズムは、十七字や三十一字の詩美とはちがひ、馬琴風の七五調と同樣に、德川末期に於て現はれた變態な日本趣味なのだ。江戸氣質は、すつきりして泥臭くないと云はれてゐるが、演劇を觀、草雙紙を讀み、役者繪なんかを見ることによつて想像すると、さしてすつきりしてはゐなかつたやうに思はれる。私の生れた故鄉の舊家には、芝居繪の厚ぼつたい綴本があつた。紙質は强靱で、色彩は濃厚であつた。祖先の誰れかが、江戸土產として買つて來たのであらうが、他

のさまざまな錦繪よりも、その綴本が幼い頃から私の興味を惹いた。百日臺の五右衞門の凄さ、法界坊の亡靈の氣味の惡さ、濃艶な女性、奇怪な顏面。――これ等の藝術には、すつきりしたところは現はれてゐなかつたと思ふ。天平時代の藝術、平安朝の文學、德川初期の文學や浮世繪などにこそ、淡白、素朴、あるひはスッキリした味ひが出てゐるのではないか。幕末の江戸人を心醉させたといはれる名人小團次の藝風など、しつこたらしい野蠻な、グロとエロの表現で、すつきりしたところも、爽やかなところもなかつたやうに想像される。

二

私は、それ等の芝居繪や、大阪で觀た右團次の演技に刺戟されて、東京の團菊左、及び、美貌の噂が田舍までも聞えてゐた女形福助(今の歌右衞門)などの芝居が見たくてたまらなかつた。そして、田舍の私塾で、「國民新聞」所載の、久保田米僊氏の劇評を讀んだり、默阿彌脚本集「狂言百種」に收められた「村井長庵」や「島千鳥」を讀んだりして、東京の劇場を空想してゐたが、しかし、默阿彌の脚本は、少年時代の私には興味がなかつた。上京後、歌舞伎劇最後の名優としてあれほど有名であつた團十郎菊五郎上演の舞臺を、辛うじて觀ることが出來たのを、私は無上の幸福だと思つた。團十郎はすでに老衰してゐた。菊五郎

も肉體の不自由を忍んでやうやく舞臺を勤めたりして、私は歌舞伎の殘骸を見たやうなものだつたが、それでも、殘骸から後光が差してゐるやうに有難く覺えた。一方では、明治の新文學や西洋の文學及び思想に心を惹かれながら、他方では苦くさい芝居に心醉してゐたのである。しかし、心醉してゐたにしても、私は、劇中の人物に同感して涙を落したことなんかなかつた。私は今日まで芝居をよく觀て來たが、一度も泣いたことがなかつた。曾我兄弟の「かたみ送り」にも、地震加藤の述懷にも感涙にむせばなかつた。それではどういふ所に興味を惹かれてゐたのであらう？

演劇の如き一瞬間に眼前から消え去る藝術には、歳月を隔てて的確なる批評を下すことが困難であつて、演劇史は藝術の骸骨史のやうなものであるが、それでも、私は、その骸骨史に興味をもつて、自分の空想によつて勝手にそれを色取つて來た。何だつて、數百年來、こんな下らない、癡呆の藝術が繁榮して、民衆がそれを喜んでゐたのかと怪みながら、「歌舞伎年代記」のたぐひを愛讀した。（西洋では、重なる文學美術については、殆んど研究し盡されてゐるので、さほどに能がなくつて、餘暇には富んでゐる好學者は、今まで人のあまり目をつけなかつた作家や歴史上の事件について、いろ〳〵の研究をして、一生の暇暮しをしてゐるものが少くないさうである。フランスなどでは、ことにさういふ暇つぶしの研究のために毎日圖書館通ひをしてゐる人間が多いさうだが、さういふ人達から、案外

面白い研究の發表が見られるのである。日本も世が進んで好學者が殖えたので、いろ〳〵な特殊研究が現はれるやうになつた。德川時代の癡呆の藝術たる浮世繪や歌舞伎や、あるひは駄文學についても、仔細らしい理窟をつけて讃美した研究が續出して、研究者自身は本當にさう思つてゐるのかと、私には不思議に思はれることもある。）

「歌舞伎年代記」は、寛永以來百數十年間にわたる江戸芝居の記錄であるが、著者が最もその技藝に心醉して、親交を結んでゐた白猿事五代目團十郎に關する記錄に、最も力を入れてゐる。人としての白猿は、一種の風格を具へた俳優で、伊原青々園氏の「演劇史」所載の略傳だけによつても、彼れの言行は我々の心に觸れるので、退隱する少し前に、岩藤に扮した時、山東京傳や京山がその樂屋を訪ねたところ、彼れも恰も弟子に襟白粉をつけさせながら、その無禮を謝して、「昨日も顏に白粉つけさせながら涙をおとし候、お素人樣ならば、倅へ家業を讓り、隱居をもすべき歳なり。然るにいやしき役者の家に生れしゆゑ、歳にも恥ぢず、女の眞似するは如何なる因果ぞ。役者としてここに心づきては、藝にも艶なく、能く舞臺は勤まらぬものなり」と云つて瀕りに落涙して嘆息したが、果して二三年の後に、向島へ退隱したことなど、その藝術的心境が面白い。しかし、その舞臺上の所演は、普通の人間味を離れ、古今東西の他の藝術とは全く調子を異にして、阿呆らしさの限りのやうであつたと思はれる。人形芝居の飜案たる時代物や、ある種の世話物はさうでも

なかつたであらうが、白猿などが得意としてゐて、當時の見物に喜ばれてゐた生粋の江戸芝居は、今日の目で見たら、とても奇怪不思議のものであつたらしい。ユーモアがある譯ではなし、曲折した人情が現はれてゐる譯ではなし、享樂的媚態が露はされてゐる譯ではなし、爽かな美夢の世界が描かれてゐる譯ではなし、超自然の偉力に驚かされる譯でもない。陰鬱な空氣と、無智のノンセンスが、「年代記」などの舞臺記錄を通して伺はれるだけである。

本舞臺三間のあひだ山組。雙方の柱釣枝。一面の紅葉。衣笠山といふ石碑。これを背景として、豪壯感をあらはす音樂として、徳川期に發明された大薩摩淨るり、「時にふしぎや忽然と、一陰の精氣立のぼり……」云々の文句が切れると、大どろ〳〵にて赤色の雲氣が舞臺に立ちのぼつて、せり出しの鳴物になつて、六部姿の白猿と、順禮姿の團藏とが、驚しき見物の呼聲のうちに、上下からせり上る。これからの二名優の對話が見物を陶醉させたのだが、對話は、要するに連絡のない、人脅かしの愚言の濫出に過ぎないのだ。彼等は、雲の色に驚いて、「奇異なる雲のふるまひぢやなあ」と云つてゐる。惡人黑主の顏がこの六部姿の白猿に似てゐると云ひ、「うろ〳〵してゐる其内に、綱目におよび都へ引れ、七條河原でさかばりつけだ」と云ふ。二人が盃で清水を飲むと、その盃は髑髏であつた。「天庭に喜怒骨ある叛逆人の髑髏、其器の毒氣をふくして叛逆をうけつげ」と云ふ。髑髏の

上に燒酎火が燃える。これは亡び失せたる橘の逸勢の髑髏で、彼れの妄執たち去らず、無念の思ひが首にとゞまりかゝる振舞をなすのである。「思へば〳〵、淺ましい、逸勢が身の成る果てぢやなあ」と、二人が歎息する。そこへ縫ぐるみの狐が出て、髑髏を取つて消失せる。白猿が懷中より位牌を出すと、その位牌に心惹かれて、美しき女形桑三郎が、狐の面影を見せながら美女の姿をして再び現はれ、狐の所行を見せる。

これは、例外に奇拔な狂言ではないので、白猿所演の芝居は、かういふ趣向のものが少なかつたことは、「年代記」によつても推察される。かういふ癡呆的演技に飽足りないで、いろ〳〵な名優が少しづつ寫實に志して、維新前には、默阿彌と小團次結託の世話狂言にまで進んだのであつたが、しかし、江戸文化の圓熟した天明寛政期の舞臺藝術の標本は、作者では初代櫻田治助、俳優では五世團十郎であつたのだ。彼等によつて圓熟した癡呆性の江戸狂言は、幾多の變遷を得て、今日までもなほ傳つてゐる。江戸の寵兒であつた初代以來の市川家の特技であつた子供染みた武勇一點張りの荒事も、五代目あたりになると、技巧が餘程加はつて來たらしいが、殺伐な趣向も惡どくなつた。

高い鼻の先の曲つた、痩せ身で金壺眼の白猿が、六部のこしらへで、笈を背負つて錫杖を突いて現はれて、一睨み睨む。ここに彫刻美がある。それから、「黛の色、山の端にかかり、眺めは春にいやまさり」と、音吐朗々と音調美を發揮する。私は、晩年の九代目の

舞臺から白猿など江戸隆盛期の名優の舞臺を想像するが、昔はもつと現實離れのした陰慘なものだつたに違ひない。この頃歌舞伎座で興行毎に陳列する徳川末期の芝居繪を見ても分ることだが、大抵はあくどくつて不快な印象が與へられる。九代目にはすつきりしたところ、爽やかなところがあつたが、あの芝居繪から判斷すると、昔の役者の所演は血のめぐりが惡かつたやうに思はれる。泥臭かつたやうに思はれる。

執念の殘つてゐる髑髏で酒をくみかはすのも、獄門首が口を利いて、通りかゝりの我が子に、無念の思ひを訴へるのも、江戸の男女は茶番同樣の遊び事として、退屈な心を紛らしてゐたのであらうが、私自身が、幼時に怪異な芝居繪を見て以來、佐倉宗吾劇の絞首臺を見て以來、歌舞伎に親しんで來たのは、茶番としてではなかつた。內心あゝいつた不思議な世界があるやうな氣がしてゐたのだ。私は、明治に生れたお蔭で外來の思想に接し、外來のさま〴〵な知識に接し、外來のさま〴〵な叡智に富んだ藝術に接しながら、德川期の癡呆の文化の感染を脫してゐないのに氣がつく。私は、謂れなき恐怖を抱かせられるやうな愚昧なお伽噺を、祖母から聞かされたのを悔いてゐるが、人間の智慧を麻痺させるやうな歌舞伎劇に親しんだことも悔いることもある。悔いたつて仕方がない。私は希臘の盛時に生れず、文藝復興期の伊太利に生れず、ルイ王朝のフランスに生れず、私の生れた時代に私の生れた土地に生れ、嫌惡すべき故鄕の田舍言葉を覺えさせられて、それによつて

まづ頭腦の開發が試みられたので、今更如何ともしがたいのである。私は、コルネーユの「ルシッド」やラシーヌの「フェードル」が自國語のやうに鑑賞され、それ等が名優によつて演ぜられるのを十分に味得されたならと、及びもつかないことを夢想してゐるが、それは及びつかないことであるから、せめて、文學では「膝栗毛」や「梅暦」の古典が自由自在に讀破し得られ、演劇では歌舞伎芝居を自分相應に翫味したことを、五十年生存中の幸福の一つと、いやでも數上げなければならぬのである。

三

白猿自身も、その祖先も、その後裔も、市川家は代々名調子であつたといふ。何々の「つらね」と云つて、ノンセンスな言葉の連續を朗讀するなど、今日の西洋音樂の獨唱合唱のやうなもので、私の聞いた團十郎の辯舌の如きは、耳に快いものであつた。彼れの「活歷」が內容は乾燥無味であつたのに關はらず、見物に快感を與へたのは、その音聲に音樂的魅力のあつたためであつた。

明治の末期に、「自由劇場」といふものが起つて、最初にイブセンの「ボークマン」を演じた。これは、新代演劇史に特筆すべきことであるが、明治初年の團十郎の「活歷」と似てゐるのだ。舊來の演劇の荒唐無稽に不滿であつた彼れが、歷史の眞實を舞臺の上に模寫しよ

うとして、備後三郎、櫻樹に詩を題する無言劇をはじめとし、重盛の諫言や荏柄の平太の國賊罵倒の雄辯劇などを續演し、一般民衆には理解されないで、當時の少數の智識階級に、彼れの「腹藝」と、名調子の獨唱美が賞讃されただけであつた。「ボークマン」その他の「自由劇場」飜譯芝居は、世界の名作としての深刻なる內容が、少數の新代兒に感銘を與へたのであつたが、かういふ芝居は一時の現象として、何等の發展を遂げなかつた。それは、民衆の趣味が低劣で理解力が缺乏してゐるためばかりではなかつた。團十郎の活歷には、獨得の「腹藝」と音聲美とだけにでも取得があつたが、白由劇場一座には、さういふものさへなかつた。「活歷」も、歌右衞門や中車などが演ずると、作そのものの乾燥無味が露出して少しも面白くないが、「ボークマン」なども、日本の劇場では、多分原作の有つてゐる箇の洗練された言葉の面白味が少しも現はれてゐないのである。「ボークマン」の初演は、私も初日に行つて見たのであつたが、退屈して、しまひの幕は見殘して歸つた。當時の新代兒が感激したのは、イブセンが日本の舞臺に現はれたといふことによつて自己陶醉をしただけであつた。俳優の新技藝があつた譯ではなかつた。團十郎の「活歷」が、「日本外史」の生氣のない梗概みたいで、活きた歷史でなかつたから消滅したのと似てゐる。一方は、本物がよくつても表現が下手であり、一方は表現が巧くつても、物がまづいので永續せず、發展しなかつた。

舞臺に於ける俳優の言語は、一般民衆の模範になるほど微妙な味ひを持つてゐる筈なのに、私は、長い間芝居を見てゐるに關はらず、登場人物の會話のうまさに心を惹かれたことは一度もなかつた。早川雪洲の變な訛のあるアメリカ移民調は、不快であるが、所謂新派俳優の殘黨の言葉だつて、耳に不快である。現代の日本語そのものが根本から美感を缺いてゐて、どうしようもないのではないかとも思はれる。文學者の文章でも、新しい文章美を現はしたものには、滅多に出くはさない。明治以來の名文家の文章に感心した時、その感心した理由を糺して見ると、そこに傳統的の古さがある。私自身が古い文學の怨靈に捉はれてゐるから、新俳優新作家の新味を鑑賞し得られないのかとも疑はられるが、しかし、新築地の俳優や曾我廼家五郎の臺詞に、何等かの藝術美があるのであらうか。彼等の發音が我々の耳に快く響くであらうか。日本語讃美の念を我々の心に起させるやうな名俳優が一人だつて現存してゐるであらうか。

私は三月初旬、東京劇場で、「辨天小僧」の稻瀨川の五人男の勢揃ひを見て、俳優美としても男性美としても、美しさを缺いてゐると思つた。昔とちがつただだつ廣い明るい舞臺で、けば〳〵しい背景の前に立つてゐるので、なほさら貧弱に、見窄らしく見えるのだらうと思はれる。寺院の佛像や佛畫を西洋館の展覽會場へ持出すと同樣の不調和が感ぜられる。俳優の技倆は必しも昔に比べて劣つてゐるのではあるまい。辨天小僧に扮した羽左衞

門の如きは凡庸でないやうである。私に取つては、舞臺上の彼れは、私の一生涯の最も親しい知人の一人であると云つていゝ。彼れの技藝の進歩の跡を、幾十年の間、止切れ〴〵に見つゞけて來た。その人の天分にもよることだが、ある職業を弛まず續けてゐると、自から技藝の上達することは、羽左衛門左團次その他の俳優諸氏の經路によつても類推し得らるれのだ。獨自の心を込めた研究がある譯ではなくつても、興行の度數が重なるにつれて、次第に上手になつたのだ。癡呆性の歌舞伎に新生命を與へた俳優はなかつたのに關はらず、長い間民衆の人氣を蓄積して來た祖先のお蔭で、技藝の眞價に一層の箔をつけられてゐるのだ。私がはじめて、「辨天小僧」といふ芝居を觀たのは、學生時代であつて、羽左衛門がまだ家橘と云つてゐた頃、東京座でそれを演じてゐた。隨分まづかつた。濱松屋のゆすりの場で、「新富町の伯父貴に叱られる」といつたやうな、五代目菊五郎を當込んだ無駄口を頻りに利いてゐたことを、私は今も記憶してゐる。だが、生意氣を鼻先にぶら下げた、落着きのないその時の「辨天小僧」は、原作の人物を、今の羽左衛門所演のそれよりも、一層適切に表現してゐたかも知れない。この人物は二十歳未滿の五代目菊五郎に嵌めて書きおろされたもので、作者は幕末の生意氣な不良少年を題材としたのであつた。今日の老いたる羽左衛門の柄に相應してはゐないのだ。私は、東京座で觀た數年後に、本物の菊五郎の「辨天小僧」を、歌舞伎座で觀て、純歌舞伎の古典に接する喜悅を感じた。その時の菊

五郎は、前年卒倒して以來の中風症がまだ治癒しないで、身體の自由を缺き、勢揃ひの時など、突かひ棒をしてやうやく立つてゐたのだが、それにかゝはらず、姿勢は亂れてゐなかつた。臺詞は沈痛を帶びて、南鄕力丸の家橘の甘つたれた調子とは、雲泥の相違があつた。しかし、これをお名殘りとして、翌年逝去したほどあつて、菊五郎の「辨天小僧」は、老人のそれであつて、いかなる技巧も老を隱し得なかつた。花道の引つこみを見てゐると、伯父と甥の道連れのやうであつた。

「よし原」と、三座の「歌舞伎芝居」が、江戸文化の中心であり、享樂の根原地であつて、大衆の心を强烈に惹きつけてゐたことは、今日の「カッフェ」と「映畫館」の比でなかつたので、文學や繪畫は、「よし原」や「歌舞伎芝居」の下風に立ち、その二つに隷屬し、媚びを賣つてゐた。馬琴の如き高慢な自信家でさへ、芝居仕立の作爲を試み、自己の作品の脚色されて舞臺に上つたことを喜んださうである。河原乞食の汚名を甘んじてゐなければならなかつたにしても、實際に於ては、一代の人心を魅惑してゐた。戯作者や浮世繪師などの及ぶところではなかつた。その風習の墮力は明治末期までも續いて、歌舞伎役者は、他の藝術家よりも遙かにつよく民衆に愛着されたのみならず、文學者や畫家は團菊に親しまれることを光榮としてゐたのだ。羽左衛門などは、江戸芝居の「花形役者」の素質を十分に持つてゐて、竹三郎時代の五代目彦三郎や、八代目や、芝翫や、あるひは、女形の田之助ほど

に滿都の芝居好きの心を湧立たせて、癡呆の藝術の空氣のうちに終始すべき筈であつたのであらうが、時代が急轉を續ける時代であつたために、道德的非難を受けたり時代おくれの「藝術家」とされたり、映畫俳優の人氣に壓倒されたりして、たとひ莫大な給金を取つて大劇場の幹部として傲然と構へてゐるとしても、その耀ける存在も、社會の一隅に潛在してゐるやうなもので、昔の人氣役者のやうに、全都の人氣を享樂してゐる華やかさがあるのではない。五代目菊五郎病氣のために、道行の勘平や、國性爺の代役を勤めた時など、大根々々と大向うから盛んな罵聲を浴せかけられながら、少しも屈しなかつた彼れは、自由劇場が起らうと、新劇要求の聲、歌舞伎沒落の聲が周圍に起らうとも、泰然としてゐたらしく、左團次や猿之助のやうな革命兒の眞似をしなかつた。私は自分の三十年間の文壇生活から類推して、舞臺上の風雨三十年、迷ひもなく惱みもなく、癡呆の藝術に安んじて來た彼れを、時として羨ましく思ふのである。

劇通三木竹二は、早くから、羽左衛門に目をつけてゐたらしく、私が劇評をやりかけた頃、「市村には坂東彦三郎の面影がある」と、氏特有の感激を籠めた感想を洩らしたのを耳にしたことがあつたが、三月興行の一番目の「先代萩」の細川勝元の如きは、私をして阪彦を空想させ、竹二氏の言葉を思出させた。五代目の勝元や實盛を模倣しながら、羽左衛門には、こせづかないところが、五代目以上に阪彦の壘を摩してゐるのであらう。五代目は、

私が觀た數年前の所演によつても、見物に媚びを賣ることを努め、また瑣末な寫實を試みてゐたことがよく分つた。ところが、羽左衛門は見物に對しては無愛想であつた。俳優も新代の藝術家として見物に媚びる必要はないと、高くおのれを持してゐるのかといふに、さうでもないらしい。たゞ時代の感化である。歌舞伎は眼前の觀客に阿ねるのを特色としてゐたので、昔は作者でも役者でも、その用意を忘れなかつた。そんなに卑屈になれないのなら、歌舞伎の味ひはそれだけ薄くなるのである。團十郎以前、明治初年に見識高かつた彦三郎程度に、羽左衛門も人品を保つてゐるが、昔の役者が、立物にしても、のろ〳〵とぼけてゐたことは、芝居繪や脚本によつても察せられる。默阿彌はその時々の役者の柄に嵌まるやうに、その時々の見物の好みに投ずるやうに、書いたのだから、その脚本を讀むと、幕末から明治初年の舞臺の光景も、俳優や見物の心理も推察されるが、それによつて見ると、若き頃の梅幸と羽左衛門の情事の表現なんか淡白無味だつたことがよく分るのだ。田村成義氏の「續々歌舞伎年代記」のなかに、文久二年の條下に、「小團次の番頭善六と、菊次郎の油屋の後家おかつと屋根舟での色合。これが夢となり、茶屋の二階で小本を讀みながら、寢てゐたといふ件、尤も評判なりしが、所謂その濡場なるものは、實に豫想に及ばぬほど醜態をあらはしたるものなりし」と云つてゐるが、幕末の歌舞伎の特色は「醜態」にまで達したので、あの頃の役者が平氣でそれを演じたのだ。默阿彌初期の作品、「夢

結蝶鳥追」は、安政の大地震直後、竹三郎が五代目彦三郎を相續する時の改名興行の二番狂言として製作されて、大當りを取つたのであつたが、この作者の一生の作風は、ここに完全に現はれてゐて、その舞臺上のエロチシズムも、想像し得られるのである。今日の俳優なら、いくら無自覺な者でも、かういふ脚本を書きおろし當時の役者のやうに演ぜられないに違ひない。默阿彌だつて、明治以後には持前のエロチックな筋立をいくらか緩和した。相手が本當の女優でなくて、女の假面をかぶつた男優であるため、濃厚な情事の眞似が臆面なく演じられたのだらうと、私は思つたこともあつたが、今思ふに、相手の女が女裝した男性であることが、却つていやらしかつたのではなからうか。自覺した俳優なら氣が差して出來なかつたであらう。だから、今の俳優は濡れ場を淡白にやる譯で、昔の役者のやうな自己沒却のべた〳〵した演出は爲すに忍びないであらう。小團次と默阿彌とが意氣投合して、江戸末期の劇壇を風靡したことは、日本歌舞伎史の異彩であつたが、寫實があまりに極端に走つたためか、當局者の忌諱に觸れて、「近年世話狂言人情を穿ち過ぎ、風俗れば、以來は萬事濃くなく、色氣なども薄く、成べく人情に通ぜざるやうに致すべし」とに拘はる事な警告を發せられた。小團次はその知らせを聞いて、「それぢや、この小團次を殺してしまふやうなものだ。もつと人情を細かに演じて見せろ、もつと本當のやうに仕組めと云つてこそ、芝居が勸善懲惡になるんぢやありませんか。見物が身につまされな

いやうなことをして芝居が何の役に立ちます」と憤慨して、つひに悶死したと傳へられてゐる。熱情に富んだ藝術家の面目がそこに現はれてゐるが、しかし、所謂「醜態を呈した」舞臺面が、爲政者の目にあまつたのも無理がなかつたと思はれる。今日なら、政令の干渉がなくつても、俳優自身にあんな眞似は出來ないだらう。勸善懲惡の蔭に隱れて、春本の實演みたいなことをやつてゐたことは、默阿彌の脚本を讀んでも察せられる。

「人情を細かに演じ、もつと本當のやうに仕組む」と云つても、默阿彌や小團次の芝居は、世相の本當の寫實ではなかつた。菊五郎の寫實自慢の社會劇だつて、瑣末な仕草や、皮相な風俗に、當時の實際を示してゐただけであつた。由來、寫實藝術は、一般人には好まれないのであらう。映畫だつて浮世の眞相や人間の本當の心理狀態をうつしたものよりも、讃らしいものの方が喜ばれてゐる。小說だつて、さうだ。默阿彌の作品には部分々々に人間寫實があるが、全體を讀通すと、本當の世の中を見せられた感じはしないで、「いゝ加減なものを書いてゐる」と有難味を失ふのを例としてゐるが、大抵の映畫を見た感じも同樣だ。

四

明治以來、文學は他の藝術より鮮かに急速の變遷を續けた。馬琴や種彥の殘黨は直ちに

影を收めて、西洋の飜譯小說が迎へられ、硯友社の小說、自然主義の小說、その他種類のちがつたさま〳〵な作品が、相應の成果を收めた。これは、文學の方面に特別に天才が現はれたためではなくつて、文學は作品一個の力と少數の讀者とによつて存在を保たれる性質を有つてゐるためであつた。演劇は民衆を相手にしなければならぬ性質上、自儘な變遷が六ケしかつた。しかし、感受性に富んだ日本人のことだから、他の社會と同樣に、演劇の方面でも舊套に安んじてはゐないで、新を求めてゐたのだ。數百年傳來の癡呆性の歌舞伎をそのまゝに受繼いで改革を試みようとしたのだから、無理な企てであつたが、演劇改良の努力史は、明治文學史以上に私には興味があるのだ。

興行主守田勘彌と、俳優市川團十郎と、作者河竹默阿彌との三人が、三樣の姿を現はして、明治初期の劇壇に華やかな活動をしたことが面白い。

西洋の演劇は日本の歌舞伎とは全然異なるもので、今日の時世にでも外國の演劇の眞の味ひは日本人には殆んど甄味し得られないのに、あの頃の洋行歸りや、西洋の戲曲の一片を讀囓つた連中の、知つたか振りの改良意見を眞に受けていろ〳〵畫策したのは、滑稽だが、兎に角、あの三人はあの時代の日本人としては凡庸でなかつた。

守田勘彌が權謀術數をたくましくして俳優を自在に使役したことは、當人も面白かつたらうが、その傳記を讀む我々も、役者の柄に嵌めて脚色した默阿彌の戲曲を讀むにもまし

た面白さを感じる。彼れは、單に營利を志してゐただけでなくつて、俳優の社會的地位の向上を計り、演劇に新味を加へんとした。松竹の社長は現在の時世に、歌舞伎劇を無上の好演劇と思つてゐるさうだが、勘彌は、あの時代に、盲目的な西洋かぶれの急進論者であつた。極端な自由民權主義者と同樣に明治初年の代表的人物と云つてよかつた。彼れは、天保以來場末にあつた劇場を、新東京の中央の新富町へ移轉しようとした。「明治の御代となりましては、謂ゆる四民平等といふ有難い時世でありますから、同じ日本國人で、貴人も下民も人一疋は同じく人一疋で、こんな好き機會に年來河原者と下げしめられた汚名をすゝぐべしと云ふが表面で、內心は淺草の片隅にゐて三座並んで興行してゐては甘い利益がない。他座に率先して、否だしぬいて、東京の眞中に陣取つて獨占の甘い汁を啜らうといふ大計略であつたらしい。」

それから、新樣式の大劇場を建設して、貴顯紳士に接近することを努め、和洋學者の意見を求め、劇界の面目を一變したつもりであつたが、見物は元より、興行者も作者も役者も後援者も、附燒刃の改良黨なので、本當の新演劇が現はれて來る筈はなかつた。しかし勘彌の意氣込みは推讃していゝのである。絕えず斬新なる趣向を構へて世を驚かさんと企ててゐた。それで、「菊五郎左團次の兩優は頭腦古くして俱に談ずべき器にあらず、團十郎宗十郎兩優に依り劇の改良を企畫するに如かずとなし、前の二人を奧羽地方へ出張ぎさ

せ、扨こそ洋行歸りの學者に授けられたる風俗人情の違ひたる外國の逸話などに基き、これを河竹にあつらへ、英米佛の三ヶ國にて有名なる所を朧ろげながら寫し出させた」。この作中には劇中劇として巴里の演劇があるのだが、それを演ずる俳優は、當時香港で興行してゐた佛蘭西か何處かの旅役者の一團であつた。勘彌の豫期に反して、見物受けはさんざんな不首尾で、非常の不入であつた。「見物は西洋人の役者が出て來て喋舌ると、其聲やら身振やらを可笑しがつて、むやみに笑つた。悲しい歌を唄つても、しんみりした話の眞最中にも、笑ひこけたのださうである」が、これは當り前だ。我々が今日、外國の本場の芝居を見ても、唄を聞いても、哀れなところ悅しいところの差別なんか分りやしない。昔の見物は分らないものを分らないとし、今日の我々は、强ひて分つたつもりになるのである。それに、この芝居は、昔ながらの默阿彌の作だから、着想脚色ともに平凡で、新しい世界を見物に分りよく見せる用意はなかつたらしい。默阿彌にそれを求めるのは無理でもある。この「漂流奇談西洋歌舞伎」の筋書を見て、私が面白いと思つたのは、西洋人をひどく深切なものとして取扱ひ、不思議に命を助かつた人々が、「外國人ほど親しみの深い者は無い」と、互ひに喜び合ふ幕切れの臺詞である。十數年前までは、夷狄として憎惡した西洋人を、俄かに尊崇して、精神的にも物質的にも外國の模倣を企てたその頃の時代相が、この芝居にもその一端を現はしてゐる。默阿彌の價値もその時代々々の常識を受入れ

てゐたところにあるのだ。勘彌の突飛な趣向も、これが文學や思想の方面であつたら歡迎されたかも知れないし、歡迎されなくつても、內心舊套を破つた誇りを抱いて、同じ態度を持續されたであらうが、芝居の方では自己滿足だけでは通用しない。勘彌は莫大な損失をして意氣鎖沈した。それを見たある人が、「凡そ改良といふものは提灯持と同樣で、足元へ出せばよいが、先へ出し過ぎると、目がちらくらして、ぬかるみへ飛び込む嫌ひがある」と、諷刺したので、勘彌は大いに悟つて、以後は國粹的舊劇の上演に安んじることにした。しかし、勘彌は損得かまはずに新を求めてそのための冒險を厭はなかつた。もつと生延びてゐたなら、次第に氣運の向いて來た新劇のために、畫策するところがあつたかも知れない。

團十郎の「活歷」も一般民衆にきらはれて、その高尙がりを猛烈に非難されて、「カッポレでも踊れ」と罵られたりした。非難だけなら忍んでゐられたであらうが、入りがなくつて、興行主に損失を掛けては、役者としての地位を失ふ譯だから、自信の强い團十郎も、飜然として態度を改め、金ピカの時代物を在來の時代物らしく演じ、その上にカッポレまで踊つた。自己の是とする新藝術が容れないで、舊態依然たる演出を繰返さなければならぬのは、藝術家として悲しむべきことで、世界の藝術史上に先覺者の屢々經驗するところであるが、團十郎は、そんな甘つたれた感傷に耽らなかつたに違ひない。おれの高尙な芝

居が分らなければ、分るものを見せてやらうと、昔ながらの癡呆性の歌舞伎芝居でもカッボレでも演じて、それ等においても、群を抜いた腕前を見せた。自己本心の要求から出た小説が讀者受けがしなければ、チャンバラ物でも、プロレタリア物でも、ナンセンス物でも、何でも見事にやつてのけて、讀者を征服したら、小説家として快心なことであらうと思はれるが、團十郎はそれをやつたのだ。彼れは、それでも、青年時代から志してゐた活歴癖から脱しきれないで、櫻痴居士と結託して、いろ〳〵な新史劇を演じた。私は、その新史劇の一つ、「芳哉義士譽」といふのを觀たが、義士が仇討後細川家に預けられてゐるところが脚色されてゐた。隨分陰屈なもので、諸新聞擧つての惡評で、團十郎崇拜者たる三木竹二氏でさへ、この名優の間違つた藝術觀に憤慨してゐた。仇討のために苦心する間が演劇の題材として興味があるので、目的を果してからの後日談なんかは、氣が抜けて、味も何もあるものぢやないといふ意味のことを云つてゐた。しかし、一概にさうは云へないと、私は思ふ。團十郎專門の「活歴」劇のうちでも、默阿彌作るところの「伊勢の三郎」や「高時の天狗舞」なんかは、私は傑れた一幕物として感心して見たのであつたが、しかし、昔の歌舞伎の様式から脱却してはゐなかつた。仇討のやうな一生の大目的を達した後、死を待つばかりの間の人物の氣持を表現しようとするのは、着想も新しい。我々の心に訴へられる眞實性は、普通のお芝居染みた義士物の比ではないのだ。たゞ櫻痴居士の技倆が拙劣

なために「芳哉義士譽」も引立たなかつた。團十郎は默阿彌の作風には飽足りなかつたにちがひない。彼れの天才をして、舊套を脱して新生面を拓くために自在に活躍させる作家がなかつたために、乾燥無味な活歴史劇か舊弊な荒唐無稽劇の間に、彼れを彷徨させたのであつた。（櫻痴居士は作者として、默阿彌のやうな天分も熟練もなかつた。）

我々はイブセンを讀んでもストリンドベルヒを讀んでも、あるひは、希臘の古典劇や佛蘭西の古典劇を讀んでも、自國の南北や默阿彌のものとは違つて、人間の眞相が紙上に活躍してゐるやうに思はれ、日本には芝居はあつても、西洋で云ふドラマは存在しなかつたのではないかと疑はれる。しかし、東洋の演劇と西洋のそれとは、根柢から異つて發達して來たのだから融和するのは容易なことではないのだ。歌舞伎役者に西洋風の新劇が演じこなせないのは當然である。それに、西洋劇を多少理解してゐたつもりの新代兒だつて、覺束ない語學の力により、あるひは粗末な飜譯によつて、原作の意味を辛うじて捉へて感心してゐるに留まつて、西洋劇の微細な技巧の妙味を會得したり、一語々々に籠つてゐる筈の言葉の魅力を感じたりすることは不可能なのだから、西洋劇作家の態度で、日本の新劇をつくり出したつて、大したものの出來る筈はないのだ。默阿彌は、世相一變した明治時代には、その時相應の風俗の描寫などして、「東京日日新聞」とか「三人片輪」とか、「霜

夜鐘十字辻筮」とか、所謂「散切物」の社會劇をつくつたが、會話の調子なんか、うつかり昔の芝居口調なのである。

明治十一年、すなはち西南戰爭直後に仕組まれた新作、「西南雲晴東風」は、人氣に投じて古今無類の大入を得たさうであるが、劇中の西郷隆盛や村田新八の臺詞を今讀んで見ると面白い。「返す〳〵も世の變革、かくまでうつり變るものか。二百年來太平に、うち續きたる舊幕も……群がる雲を吹拂ふ風穩かに治まりて、漸く四海靜謐に、至りしも又九州の佐賀山口に浪立ちしが、岩に碎けて跡もなく、其暴風の西南に二たび起る薩摩潟、船の針路も逆ゆゑに、終には賊の名を取つて、海より深き勤王の、志さへ今日となり、盡力せしも水も泡。果なく消るも遠からず。實に一生は一睡の、誠に夢で、あつたよなあ」と云つた調子なのだ。現代の人物を寫すのにかういふ會話を用ひて、作者も役者も平氣であつたし、見物も不思議に思はなかつた。歌舞伎式會話のマンネリズムが業病の如く人心に浸込んでゐるためか、或は現實の日本語は、藝術美を缺いてゐるためであらうか。下層社會の人物が、感情の高調に達した時に用ひる言葉は、なほさら現實の言葉では舞臺の上で通用しなかつた。

明治十三年に舞臺に掛けられた「霜夜鐘」で、讃岐金助がおむらを口説くところで、「そんなに愕くことはねえ、菊屋橋で俥屋が切れた草鞋を履換へる、其時ちやうど新堀から出

合頭に提灯の明りで思はず見てびつくり、ぞつと素顏の中年增、其面ざしは覺えのある金瓶樓の小紫。以前に替る權妻風にふつと起つた煩惱から、直ちに菩提の寺町通り、跡からつけて行つた所、寒さに一ぺい呑してくれと、ねだる酒手に途中から、下りた所も車坂町、鬢のほつれか櫻香の軒にかくれて拔いた簪、安くふんでも四五十圓……」と云つたやうな感情の吐露は、默阿彌獨得のものである。

この種類の臺詞は、いろ〳〵な役者がいゝ氣になつて用ひ、假色使も賣物にし、見物も喜ぶのだ。我々が今日これ等の臺詞を讀むと、眞實性に乏しいいや味な文章だと思はれるが、明治十年代二十年代に日本の空氣を吸つて育つた我々は、かういふ音調に詩趣を感じるやうに習慣づけられてゐる。音樂には國境がないやうに云はれるのは謊であつて、外國の音樂を聽分けることは至難のわざである。假りに外國の詩あるひは文章でも讀んで見るに、その音調の美は、とてもよくは心に傳はつて來ないので、「草枕旅にしあれば……」とか、「久方の光のどけき……」といふやうな言葉が、直ちに滑かに我々の心に觸れるのとはちがつてゐる。西洋の芝居の臺詞にも、文字の意味以外に、聽衆の心を動かす特種の味ひを、國により時代によつてそれ〳〵に持つてゐるに違ひない。それは他國人、少くとも東洋人には伺ひ得られぬ境地である。シェークスピアの頻繁に用ひてゐる誇張した譬諭なんか、我々には馬鹿らしく思はれるだけで、藝術的快感は少しも得られないが、しかし、外

國人には、我々が默阿彌慣用の美辭麗句から感じる程度の快感を、それによつて感じてゐるのであらう。

默阿彌の淨瑠璃の詞句を見るといゝ。それは歌舞伎に味をつける彼れの詩であるが、江戸音樂の特色をもそれによつて伺ひ得られるのだ。この作者が常識的であるためか、激情のあらはれも、崇高な感じも出てゐない。雪月花や、四季の草花や、自然の風物の推移を材料として、色戀の情緒を弱々しく詠じてゐるに過ぎない、明治七年の「さんぎりお富」の狂言には、歌澤が劇場音樂に用ゐられてゐるが、その時の新作淨瑠璃は、默阿彌の特色をよく現はし、また江戸傳統の音樂情調をよく現はしてゐる。

「打水に殘る暑さも何處へやら、軒の簾に波打ちて、暮れぬ先から月影を、宿す小庭のにはたずみ。誰れをまねくか招くか誰れを。尾花の露のはら〳〵と、風に鳴子の切戸口。歸る燕に來る雁を、待つ夜はつらき鐘の聲。身にしむ秋の村雨に、濡るるも戀の緣のはし。いつしか空も吹晴れて、雲間を洩れる月の影、ぞつと素顏に風涼し。今の隔ても仲垣に、みだるゝ萩や女郎花。よそめに云はぬ色見えて、思ふ心の梢まで、何處かで葛の恨みがち。あした待たるゝ朝顏も、戀のみ苦が花なれや。忍ぶ其身に桐一葉。落ちて驚く胸の浪。實に辛氣ぢやないかいな。」

歌澤のやうな四疊半式の低唱音曲だけでなく、「かりがね」でも、「三千歲」でも、「十六

夜」でも、今日まで流布してゐる淨瑠璃は、必竟かういふ型で情調があらはされてゐるので、我々が色つぽさを音曲によつて感じたのは、默阿彌の詞句に含まれてゐる程度のものであつた。こんなものでは滿足されないほどに世は變遷して、私にしても、最早延壽太夫の美聲で唄はれる「三千歲」などにも感歎されなくなつたが、しかし、それに代るに足る色つぽい音樂があるであらうか。さき頃來たダルモンテ夫妻の獨唱や合唱には、西洋風の色つぽさが溢れてゐるらしく想像されたが、あの色氣は、米の飯に刺身や澤庵を添へて食つてゐる日本人の色氣とは懸離れてゐる。羽左衛門と梅幸の色合は、前に引用したやうな默阿彌の詞句や、淸元や常盤津の音色とともに、新代人には空々しくなつて、あんなものでは戀愛の恍惚境に惹入れられなくなつてゐる筈だ。今日の日本人を有頂天にするやうな自國の音樂は、何處にもない譯だ。しかし、昭和の今日でも、默阿彌つくるところの淨瑠璃が、劇場に於ても、市井に於ても、なほ盛んに唄はれてゐるのによつて見ると、あの調子の音樂には、乾涸びた人間の心をうるほし、色氣を覺えさせる魅力を有つてゐるのであらうか。

五

震災前の東京は、我々の記憶に薄らいでゐる。昔から親しんでゐた銀座でさへ、街上の

光景がハッキリ思出せなくなつた。劇場もいつから今のやうに明るく、今のやうに華美になつたか忘れたが、私などが芝居に親しんでゐた頃は、四桝四五人詰の土間に窮屈に坐つて、所謂「菓辨壽」なるものを食つて、見物してゐたのであつた。幕間の長短もその日〳〵の出鱈目だつたらしく、五代目菊五郎の芝居では、一日の演技時間の總計よりも休憩時間の方が長いやうなこともあつた。正午の開場は普通で、朝の九時からはじまる劇場もあつた。大劇場が毎月興行を續けることはなくつて、當つた芝居でも、連日の滿員は珍らしかつた。歌舞伎座の土間に、二三十人しか觀客の來てゐないのを私を見たこともあつた。その後、茶屋や出方の廢止、觀覽席の改革、場内の裝飾など、外形的には、新文明國の劇場として立派に面目を具へるやうになつたが、進歩が外形だけに留つてゐるのは、衆目の一致して認めてゐるところである。何ケ月も續演されて、至るところで噂に上るやうな芝居は近年絶無であるが、それは近年だけではない。私の觀劇三十年の間に、滿都の人心を湧立たせた芝居が一つでもあつたであらうか。「世の中は團十郎や今朝の春」といふ江戸歌舞劇の讃美の聲は、維新以前のことで、九代目團十郎に向つて捧げられてゐるのではなかつた。我々が江戸人の享樂の殘骸を有難がつたのは、いつまでも馬琴や種彦を讀んでゐると同樣、不甲斐ない譯だつたが、私は、將來とても、純粹な新國劇は起る見込みはないと思つてゐる。小説や繪畫に多少新味のある傑作が現はれたのは、それ等の藝術が少數の鑑賞

家を相手に存在し得られたからなのだ。芝居も西洋のやうに、小劇場が經濟的にも維持されるやうになつたら兎に角、今の日本ではその望みもないし、第一、非常の天才でも突然出現しない限り、日本には戲曲といふものは現はれ來ないのだ。日本には、演劇史はあつても戲曲史はなかつたやうに、私は思つてゐる。世界中映畫の跋扈のために、演劇は滅亡に瀕してゐるらしいと云はれてゐるが、たとひ、演劇は亡んでも、西洋諸國には、古來の傑れた戲曲が燦爛と永久に光を放つてゐて、映畫の如き小兒藝術に滿足しない人間に鑑賞に供されてゐる。日本には、江戸芝居から映畫にうつるので、その間に西洋模倣の新劇の製作に努めたのは、空な努力であつたのだ。

それで、私は、江戸時代に生れてゐたなら、一代の人心を壓倒すべき素質をもつてゐる羽左衛門や菊五郎などの舞臺姿を、日本の最後の演劇として見てゐる。亡國史に興味を有つ私は、それと同樣の意味で、演劇滅亡史にも多少の心を惹かれる。華美な劇場をも賑かな見物をも、秋風蕭條たる墓地のやうに見てゐると、そこに舞臺の空々しい癡呆藝術よりも、もつと生々した人生詩が、我が心に感ぜられるのである。この原稿の最初に引用したボードレールの「象徴の梟首臺」の句も私としては、ノンセンスではないので、新日本の藝術的樂園の道は遠く、いろ〳〵の艱難の旅を辿つて、いつかは辿りついても、そこに自己の姿が「象徴の梟首臺」にかゝつてゐるのを見るかも知れない。「モナリザ」の微笑、ボード

レールの象徴が、獨合點の謎である如く、私が新日本の藝術の將來を「象徴の梟首臺」と觀じるのも、私自身の獨合點である。

團十郎が「島の爲朝」で凧の行方を見詰めるところ、「高時」で、天狗に飜弄されて、よろけながら足拍子を踏むところ、「愛宕の光秀」で三寶を踏碎き刀をかついでの睨みなど、私が見た晩年の彼れの所演だけを回顧しても、そこに彫刻美があり、象徴の幽玄味があつたやうに思はれるが、それも私の買被りでもあり、獨合點であるかも知れない。しかし、默阿彌がいくら上手な狂言作者であつたにしても、常識以上の深い藝術境に入つた人でなかつたのに反し、團十郎は、歌舞伎の空氣に育つて環境が卑俗であつたにかゝはらず、無意識のうちに、藝術の極致に多少悟入してゐたのではなかつたかと想像される。彼れの尙古癖や高尙がりは、淺薄な審美觀であつたにしても、形式や官能や瑣末な寫眞美だけに飽足りない藝術の極致を、彼れは見詰めてゐたところもあつたのであらう。

高尙がりと云へば、最近の高等學校校長會議で、「時代の趨勢に從ひ、學生に高尙淳美の趣味が次第に缺けたやうであるから、謠曲や漢詩和歌俳句の如き研究會を奬勵すること」を申合せたさうである。謠曲和歌あるひは俳句は、日本特有の古典として、味へば味ふほど滋味のあるものらしいが、在來の風流人の弄んだ意味の高尙淳美の趣味をそれ等のものから得ようとするだけであつたら、甚だ頼りないのである。謠曲その他からは、花鳥風月式

の生氣のない高尙淳美しか汲取れないとしたら、藝術として價値が左程高いとは云はれない。日本の古典は、微溫的で、人生に對し社會に對する危險思想なんか絶對に含んでゐないのであらうか。若しさうだとすると、そんな微溫的な、力のない藝術に、若い身空で心醉し得られないであらうとも思はれる。

（昭和六年七月中央公論）

文藝復興叢書　第二十

昭和九年六月十五日印刷
昭和九年六月十九日發行

〔我最近の文學評論〕

定價　壹圓

著者　正宗白鳥
發行者　山本三生　東京市芝區新錦七丁目十二番地
印刷者　福山福太郎　東京市牛込區西五軒町三十四番地

東京市芝區新錦七丁目十二番地
發兌　改造社
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二一番至一一二四番

(福山印刷製本所)

版權所有

9.6.19

(福山製本)

文藝復興叢書

花花	横光利一	通百丁目	十一谷義三郎
水晶幻想	川端康成	跫音	龍膽寺雄
雪崩	深田久彌	逃亡記	井伏鱒二
權といふ男	張赫宙	レドモア島誌	中河與一
勿體ないご時世	芹澤光治良	ムベ館サクラ座	宇野千代
散文家の日記	林芙美子	馬	阪中正夫
勘定	武田麟太郎	職業	岸田國士
燃える石	藤澤桓夫	文藝從軍記	杉山平助
青空	林房雄	樣々なる意匠	小林秀雄
昭和初年のインテリ作家	廣津和郎	文學の世界	谷川徹三
湯河原三界	宇野浩二	人間學的文學論	三木清
町の踊り場	德田秋聲	我最近の文學評論	正宗白鳥

新四六判上製各册三百頁内外　各册定價壹圓　郵税八錢

659
21

終